セカイ(修正版を投稿するので連載中止します)

妄想野朗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
セカイ（修正版を投稿するので連載中止します）

【Ｎコード】
Ｎ６５３４Ｖ

【作者名】
妄想野朗

【あらすじ】
世界には様々な世界がある。
人間界・冥界・竜界・・・様々な世界が存在しておりその総称をセカイと呼ぶ。
その数多の世界には様々な種族が。
人間・妖怪・天人・竜人・幽霊・神様などの種族が存在している。

更に、世界には能力を持つ者も居て、基本的には魔法使い以外の人間以外の種族は能力を持つ。

そんな様々な種族や文化が入り交じった世界で物語が始まる――。

【この作品は他サイトとの重複投稿を行ってます】

神社所有者（前書き）

はじめまして、妄想野郎です。
初作品ですがよければ感想、アドバイスなどをいただければ幸いです。

神社所有者

「なんで最近の依頼は厳しいやつばっかなんだ――っ！！」
夜の人間界の森の中。　そこを全力疾走しながら五十嵐（イガラシ）　漸（ゼン）が叫ぶ。
「まてや人間！！」
その後ろを、草や石を蹴り飛ばしながら追いかけるボロボロで薄汚れた着物を纏った鬼のような厳つい風貌の男が数人。　この男達は、妖怪である。　今、漸は何故追われているかと言うと、神職である漸に人里を荒らしている妖怪の退治の依頼が来ており、妖怪の退治に向かった訳だ。　だが、いつもより妖怪の数が多い。　そのため苦戦してしまい、一旦引いて体勢を立て直そうとしている次第。
だが、妖怪達はそう簡単には逃がしてくれない様子だった。　追尾能力でも持っているんじゃないだろうか、と思うくらいしつこく漸を追いかける。
「もう面倒臭いな、アレ使うか！」
このままではこっちの体力が尽きるのがオチなので仕方ない、と妖怪達に向き直る。
「へへ……ようやく観念したか。」
すると妖怪達もニヤリと気味悪い笑みを浮かべながら立ち止まる。
「観念するのはそっちだよ！！」
「！？」
次の瞬間、漸は右手を妖怪に向けて突き出した。　その夜、森に光りの柱が突如、現れたという――。
「――疲れた……」
人間界に朝日が差し込む頃、五十嵐　漸は盛大なため息をついて呟いた。

あれから漸は、妖怪を何とか退治し、一晩中走りつづけて全身に乳酸がたまった鉛の様に思い足を引きずり里からかなり外れた所にある、自分の家の「幻神神社」へ続く木々に囲まれた石段を登っている途中だった。　乳酸も溜まり、疲れたからか、いつも楽々と登っている石段が長く感じる。

「あ、お兄ちゃんおかえりなさい」

「……ああ、麗か」

顔を上げると、そこには巫女装束を纏った、黒髪で前髪は切り揃えられており、後ろ髪は背中まで伸びていて顔は幼げな印象の女性。

漸の妹の五十嵐（イガラシ）　麗（レイ）が笑顔で迎えてくれた。

「ただいま」

「うん、ところでお兄ちゃん顔色悪いけれど、大丈夫？」

「ああ、かなり走ったからな、ちょっと疲れただけだ」

「そうなんだ……、じゃあ庭掃除は私がやるからお兄ちゃんは休んでてね。」

麗はそう言い近くの木に掛けてあった箒を取り、掃除を再会する。

「解った。じゃ休ませてもらうな……」

漸は麗に礼を言うと誰から見ても倒れるんじゃないか、こいつ。とか思う様な足付きでヨロヨロと母屋へと向かって行った――。

「あ、そうだ。

お兄ちゃん、今日は神社所有者の集会あったよね？」

――太陽がちょうど真上に昇る頃、漸が起床し居間の座布団に腰を降ろした時だった。　麗が思い出したかの様に問う。

（ああ、そういやあったな、集会……）

最近は本当に忙しいな……と、漸はため息をつきながら髪を掻きむしる。　というか疲労困憊の身体には死人に鞭打つ様な物ではないだろうか？　とも思うが仕方ない。

ちなみに、神社所有者の集会とは、この世界には様々なセカイが

あり、その様々なセカイの神社を所有する神様に仕える者が集まり、さまざな議論をする集会。　漸と麗もその一人である。　狼神（イヌガミ）という神様に仕える神社所有者だ。　基本的に集会に参加するのは兄の漸。　ちなみに麗は留守番役である。

「ねぇお兄ちゃん、たまには私が神社所有者の集会に出て行こうか？」

「いや、ダメだ。　今回の集会は冥界だし、お前は戦う力を持ってないだろ？　だから道中妖怪や悪霊に襲われたら危険だ」

と、漸はお茶を飲みながら麗の申し出を断った。　麗は戦う力を持たない。

そのため危険だから一人で向かわせる訳にはいかないのだ。

「むぅ……解った」

すると、麗は理解してくれたのか、う〜〜……、と仔犬の様に唸りながらも小さく頷いてくれた。

「じゃあ、俺はそろそろ行くとするよ。　麗、夕飯時には戻ってくる。」

「うん。　道中気をつけてね？」

すると、麗がまた心配そうに漸へ声を掛ける。

「ああ、行ってくる」

さっさと草履をはき、玄関から出ると、麗は玄関から行ってらっしゃーい、と笑顔で漸を送り出す。

漸はそれに応え、神社を発った。

彼は遅れない様に今回は早めに出発した。　今回は大丈夫な筈なんて思っていたのだが。

「――遅刻だ……」

迷った。　冥界の神社へ向かう為に、人間界の幻神神社から南端の場所に冥界へ通じる林道がある。

彼は毎回そこで道に迷っていた。　そして今回も、道に迷ってしまった。
「やべぇ……また遅刻か……」
今は何とか林道を抜け、冥界に入り神社へ向かっている。
漸が深いため息をつくと、目当ての神社が見えてきた。　ちょっと灰色が掛かった屋根の神社。
そして神社の周りは塀で囲まれており、入口が一カ所しかなく、そこには鳥居が立っている。　冥界の神社、霊泉神社。
「五十嵐　漸、遅い！！」
「え？」
鳥居をくぐると少し釣り上がった目の、髪が灰色で少しボサッとした癖のある長髪。
髪は腰辺りまで伸びている。　服は灰色の掛かった色の巫女装束で、襟が死装束と同じ形の服を着た幽霊の巫女が待ちくたびれた様子で声を掛けてきた。　彼女は冥界の神社所有者の霊泉寺（れいせんじ）　櫟（いち）。
よく集会を開く場所を提供している。
「あ、櫟……」
「あ、櫟、じゃないわよ！あんた何度遅刻すれば気が済むのよ！！」
すると、櫟が妖怪も逃げ出すんじゃないかとも思う様な鬼の形相で漸に詰め寄る。
「さ、３０回……くらい？」
「ぶっ飛ばす、わよ？」
櫟の周囲に霊気がオーラの如く漂う。　軽く殺意も感じられる。
怖い。
「す、すみませんでした！霊泉寺さん、ふざけてすみませんでしたぁ！」
このままではヤバイ、ととりあえず、謝る。
「……え？あ、わ、解ればいいのよ。　解れば」
すると漸が謝ったのが意外だったのか、少し予想外だ、と言った様な表情で許してくれた。

「……でも、毎回待たされるこっちの身にもなりなさいよ……三時間も待たせて…」
すると、櫟はぶつぶつと何か言いながらそっぽを向いた。
「え？　お前三時間もここで待ってたのか？　部屋の中で待ってりゃいいのに」
「う、うるさい！　皆はもう集まってるわよ、さっさと来なさい！」
「わ、解った！　解ったから引っ張るな！」
そして、漸の腕を引っ張って強引に神社の中へと引っ張って行った――。

――漸と櫟が母屋に入ると、テーブルを囲む形で二人のセカイの神社所有者が座っていた。
「皆、漸が来たわよ」
櫟が皆に呼び掛けると、皆はこちらに視線を向ける。
「……ようやく着たか」
正面の真っ黒な髪の神社所有者がため息混じりに呟く。　見るからに待ちくたびれていた。
「まあ、これで今回召集された四人が揃いましたから、集会を始めましょう」
すると先程呟いていた神社所有者の隣に座っていた金髪の神社所有者が呼び掛ける。　背中には金の翼。
「ああ。　早いとこ始めよう」
そして、神社所有者同士の集会が始まった。

「――では、まずは最重要議題の異常現象やなどについてから始めますね」
議長の神社所有者が言う。　その現象とは、セカイ各地で起こる能力者による事件のことを指す。

また、神社所有者とは、神社を管理しながら、自分の仕える神様の信仰を集めたり、事件や問題を解決、里などからの悪霊や妖怪、手配者の退治などの依頼を受けたりする者の事を指す。
簡単に言えば、セカイを守る者という訳だ。
「漸。　貴方の世界、人間界では最近、異変や事件は起きていませんか？」
議長の神社所有者が漸に問ってきた。
「いや、妖怪退治ぐらいしかしてないな。　得に厄介な問題は起きていない」
「では、櫟は、この冥界では何か問題はありますか？　」
漸が問いに答えると、次は櫟に質問が向けられる。
「特にないわね。　」
櫟も即答。
「そうですか……では、魔界では？」
「……俺も、問題なし」
魔界の神社所有者も言う。
「解りました。　私の方も安泰です。　厄介な問題などの心配は今のところはないみたいですね。
では、次の議題に……」
議長が次の議題に進める。
このあと、神社所有者達は淡々と議題を進めてゆき、特に問題もなく、集会は無事に終え、それぞれ住む世界へと解散した。　漸が家路に着く頃には人間界は既に黄昏時だった。

「ただいまーー」
漸は神社の母屋の玄関を開けて麗に聞こえる様に叫ぶ。
すると山彦の様におかえりー、と部屋の奥から妹の麗が現れる。
「お兄ちゃん、お疲れ様。

あと今胡弓ちゃん来てるよ。」
そして、縁側の方向を指差す。
「え？　胡弓が？」
「うん。　お兄ちゃんもお話してきたら？」
「そうだな…ちょっと話してくるか」
漸はあいつ最近よく来るなぁ、と欠伸をしながら縁側へと歩いて行った。

「――あ、漸帰ってたんだ」
「ああ、今帰ってきた」
漸が縁側に向かうと、そこには緑のポニーテールに、花柄の薄い緑の和服を纏ったぱっと見十歳程度の少女、そしてその少女の腰には楽器の「胡弓」が置かれていた。
この楽器、胡弓が彼女の名前である。　いつも胡弓を持っているから胡弓（コキュウ）。　そう呼ばれていた。　また、彼女は妖怪で、【胡弓の音色を鎌鼬（かまいたち）に変える】能力者。　鎌鼬の派生系の妖怪らしい。
また、胡弓は非常に臆病なので喧嘩は愚か、他人の悪口さえ言えなく、昨夜退治した妖怪と違い、悪さをする訳ではなく、人間とも仲が良い。
妖怪と言っても皆が皆、悪い事をするとは限らない。　人間で言えば犯罪を犯した人間とそうではない人間の様なもので胡弓は後者に当たるだろう。
「最近よく来るな、お前」
「うん。　ここに来るとお菓子貰えるからね」
胡弓は笑顔で菓子袋を抱きしめながら答える。　まさか、菓子目当てか？
なんて思ったが漸にとってはどうでもよい。　それにあまり菓子は食べないので余った菓子を回収して貰えるからいいか、と思っていた。

（今日はもう仕事もないし、ゆっくり出来るな……）
「ところで漸、なんだか嫌な気配しない？」
「え？」
そんなことを考えていると胡弓が唐突に、嫌な予感を運んで来る。
それに漸は辺りに注意を向けると、胡弓の嫌な気配というモノが掴めた。　前方の草の茂み、そこから妖怪特有の妖気が漂っている。
しかも、それは昨晩滅した妖怪の。
「あ、昨晩一人だけ逃がしてしまったんだった！」
ここで漸は思い出す。　そういえば一人逃していた。　どうやら仕返しにでも来た様だ。
「やっと気付いたな？」
すると明らかに怒っている妖怪が一人、茂みの中から出てくる。
それと同時に胡弓は漸の背中に隠れる。
「仕事終わったのに、またお前かよ……」
漸はようやくゆっくり出来ると思った矢先、妖怪が現れ仕事が増えた事にどんよりとした欝オーラを放ちながらため息をついた。
本当に今日は散々だ、と。
「てめぇ、ナメてんのか！？　ぶっ殺すぞ！」
その様子を見た妖怪はどこぞの不良だ、と思う様に声を荒げて怒鳴り散らす。
「どっちにしろ殺すつもりで来たんだろ？　胡弓、母屋の中で麗と隠れてろ」
「う、うん！」
胡弓は楽器とお菓子を持って母屋の奥へと走って行った。　そして漸は庭へ降り、妖怪に対して身構える。
「滅された仲間の敵、取ってやるよ！！」
すると、妖怪は漸へ向かって突進してきた。
漸は咄嗟に横へ跳び、それを避けると、お札を持った左手で、妖怪へ掌打。
「グッ……」

お札が効いたのか妖怪は少しよろけるが、直ぐに体勢を立て直して漸に蹴りを入れた。
「っ！」
漸は右腕で蹴りの直撃をまのがれたが、数メートル吹っ飛ばされる。
（流石に疲れた身体じゃあいつものように動けないな……）
「仕方ないな……能力使うか……」
漸はこれ以上長引かせていればこっちの体力が限界に達しそうだと判断し、妖怪へ向かって走り出した。
「妖怪相手に真っ向から向かって来るってお前、バカかぁ！？」
すると妖怪はニヤリとチェシャ猫の様な笑みを浮かべて漸へ向かって走り出す。
「バカはお前だ！　昨晩使った俺の能力くらい覚えてろ！！」
「！」
そして、漸は右掌を突き出すと、漸の右掌からは神々しい光りの柱が放たれ、
「ギャァァァァァ！！」
それは妖怪を焼き尽くし、それを喰らった妖怪は断末魔を上げて吹き飛ばされた——。
「はぁ、終わった……」
漸は大きなため息を吐いて膝が地面に吸い込まれる。　また余計に疲れた。
鞭打ちすぎだろ……とも思う。
「クソッ…何で人間の癖に能力使えんだよ…っ！」
すると先程倒された妖怪が掠れた声で言った。　本来、基本的に魔法使いや陰陽師を除いて人間は無能力だ。　だが、漸は人間でありながら能力持ち。
魔法使いでも、陰陽師でもないのにも関わらず。
なのに何故かと言うと、神社所有者には皆僅かだが神力がある。
漸はその神力を他の神社所有者よりも多く神力を持っており、そ

れが能力として使える様になったのだ。
漸の能力は【神技を使う】能力。　ちなみに先程放った技は【光神】という神技で、今の漸に使える唯一の神技。
他にも、自然の力を少しだけ利用する事も出来る。
それが漸の能力――。
「――漸、終わったの！？」
「お兄ちゃん大丈夫！？」
あれから半刻程経過した頃、母屋の中から麗と胡弓が走ってきた。
ちなみに妖怪はもう里を襲わない様に念を押して住家に帰らせた。
「ん、ああ。　大丈夫」
「良かったぁ～……大変だね、お兄ちゃんも」
「まあ、いつもの事だし、もう慣れた。」
漸はよっこらせ、と立ち上がる。
「そういえば胡弓ちゃん、もう夜だけど、帰らなくても大丈夫？」
すると麗が思い出したかの様に胡弓へ問うと、胡弓はあ、と口を開け、慌てて楽器と菓子袋を持ち、
「うん！　私そろそろ帰るね！？」
そう言い風の様に帰って行った。　流石は妖怪、子供でも早い。

「さて、俺達も部屋に戻るか」
「うん、夕飯の支度しなきゃ」
漸も疲れたので部屋の中に戻り、その日は夕飯を済ませて就寝した――。

里

翌日、幻神神社では、漸と麗が、神社所有者の仕事の一つ、結界の管理を行おうとしていた。

「麗。　そろそろ準備……」

漸が神社の中で身支度を終えた漸は麗の部屋の襖を開ける。

「でき、た……か……？」

「え？」

すると部屋の中に居た麗は漸と目が合うと固まり、ふえっ、と引き攣った表情で顔を赤くする。　何故なら、今麗は着替え中で、服を纏っていない生まれたままの姿だったからだ。　まあ、大切な所は手に持っている着物でギリギリ隠されているが。　二人の時間が一瞬、止まる。

「へ……」

「し、失礼しましたぁ！！」

漸は慌てて部屋から回れ右して離れようとした瞬間。

「入る前に確認くらいしてよ、バカァ！！」

「ぐはぁっ！？」

顔面をトマトの様にして涙目で激怒した麗が投げた裁縫箱は漸の後頭部に命中して漸は流れるかの様に倒れた。　ちなみに結界の管理とは、自分の担当するセカイには、必ず一つ、そのセカイのパワーバランスを保つ結界が存在する。　その結界の管理も神社所有者の仕事の一つ。

もし、サボったりしたら、いずれ結界は崩壊し、そのセカイに住む妖怪や神様、能力者などの莫大なエネルギーを押さえきれず、セカイは崩壊してしまうのだ。

そして、その結界に触れる事の出来る者は神様、または神社所有

者のどちらかだ。　だから結界の管理は怠ってはいけないのだ。
「お兄ちゃん！　準備できぎゃあっ！？」
身支度を終えた麗が勢いよく玄関から飛び出した瞬間、何もないところで、盛大に転んだ。
「……もう少し落ち着いたらどうだ？」
すると、漸が苦笑いしながら麗に言う。　今までに何度この玄関で転んだのだろうか？
三桁は行ってるのでは？　などと考えていると、麗は痛そうに頭を押さえながら起き上がり、こう言った。
「じゅ、準備完了ぉ・・」
「よし、じゃあ行くか」
そして二人は神社の裏手に向かって歩きだした。

――神社の裏手に回ると、森の様に木々が生い茂っていて、その中の開けた空間、そこには巨大な結界が張られていた。　結界は丸型で、お経の様な文字がびっしりと書かれている。　これが、人間界のパワーバランスを保つ結界。
「よし、麗。　俺はお札を張り付ける。
お前は結界に異常をきたしている部分があれば補強してくれ」
漸が懐からお札の束を取り出す。　結界の管理方法はセカイによって異なるが、人間界の結界は、漸がお札を指定したヶ所に張り、麗が結界に異常をきたしている部分を麗の結界術で修復する。
結界の修復、これは、麗にしか出来ない。　麗は結界の知識が豊富で、大抵の結界なら張れる。
だが、戦闘などには結界を張るのが間に合わない事が多いので、結界修復を専門としている。
「お兄ちゃん、お札張れたー？」
麗が漸に呼びかける。　見ると麗は既にお札を周囲に張り、結界の組式を組み終えていた。　相変わらずお早い。

（俺もそのくらい早く結界組めたら一人で結界の管理できるのになぁ……）
などと考えつつ漸も最後のお札を張り付ける。
「よし、麗いいぞ。　発動しても」
漸はそう呼びかけながら結界から離れる。　すると、麗は頷き、周囲に張り付けたお札を発動。
その瞬間、お札が光りだし、一瞬にして結界に向かって飛んでゆき、張り付いた。
「終わったよ」
麗がニコッと微笑みながら言う。　相変わらず結界張るのが早い。
「じゃ、帰るか」
「そだね」
二人は仕事も終え、神社に戻って行った。

――神社の玄関に回ると、後方から二人を呼ぶ声が聞こえてきた。
「漸～、麗～。　遊びに来たよ～」
その声はいつも聞く声。　胡弓だ。　二人が振り向くと、緑の髪をなびかせながらこちらに向かって走ってきていた。
「胡弓か。　毎日飽きないな」
「え～？　別に飽きないよ？　話し相手いるし。　あとお菓子貰えるし」
胡弓が二人の前に立ち止まり、言う。　やはりお菓子目的？
「胡弓ちゃん。　残念ながら今、神社にお菓子は残ってないよ？」
麗が言う。　すると胡弓が驚愕の表情を浮かべる。　ショックだった様だ、というかこいつお菓子しか用が無いだろ。とまた心の中で呟く。
「お、お菓子が……無い！！？」
胡弓が抱えている楽器『胡弓』を地面に落とす。

「そんなにショックなのか！？」
「うん……」
「じゃあ、買いに行くか食べに行けばいいだろ、里とかに」
漸が胡弓のその様子に苦笑いしながらそう言った。　それを聞いた胡弓は、急に立ち上がり、
「行こう！　いざ人里へ！」
と、目を輝かせながら漸の腕を掴んで言った。
「ま、まさか俺が買うのか……？」
「うん」
胡弓が笑顔で答える。　いや、ちょっと待て、待ってください。
「お前……自分の金は？」
「持ってないよ。　だって私子供だし、その辺の森の中で寝泊まりしてる妖怪だよ？」
「……麗」
麗に視線を送る。
「買ってあげたら？」
すると冷たい視線を向け、その一言。　地味に朝の事根に持っている様だ。
（俺、余り持ち合わせないんですけど……？）
漸の顔からダラダラと滝の様に汗が流れる。　今の漸の財布は火の車。
「じゃあ、仕方ないから私が出すよ」
麗が漸の反応からして余り持ち合わせがないと長年一緒に暮らしてきた勘で察したのか、仕方ないなぁ、と麗が出してくれる事になった。　そして、三人は神社を出て里に向かった。

里までは凡そ徒歩３０分の距離。　神社から出て長い長い石段を下れば、妖怪に襲われる心配があまりない。　それは見通しがいいからだ。　三人は緑豊かな景色を見ながらその道のりを談笑しなが

ら歩いていた。　そして、里に着いたのは昼前だった。　里は、昔の日本みたいな風景で、緑が多く見当たる。　どこか懐かしい風景。見ているだけで落ち着く様な景色だ。

「で、どの店に入るんだ？」

里に着くと、店が連なる大通りを歩きながら漸が二人に問う。

「んーとね～……」

胡弓がまるで小さな子供みたいに目を輝かせながら辺りの店を見渡す。　現に小さな子供だが。

「あの団子屋さん」

胡弓が少し前に見える団子屋を指差した。

「じゃあ入ろ？」

「ああ」

そして三人はその団子屋に入って行った。

「ふおおぉぉぉい……」

団子屋に入ると、プルプルと貧乏ゆすりの全身バージョンみたいに震えながら奇声を発しながら変なじいさんが現れた。　持っているお盆の上に乗っている皿がカチャカチャ、地震が起きているかの様にと振動している。　……まさか、店主？

「あ、あの……店主ですか？」

麗が恐る恐る変爺に聞く。するとじいさんは奇声を発しながら頷いた。

「……変なおじいさんだね」

胡弓が漸に耳打ちする。　変というか、怖い。

「では……注文どうぞぉ……」

店主がプルプルと震えながら三人に言った。　大丈夫か？　こいつ。と三人は内心不安になる。

「えー、あー、団子九つ？」

「かしこまりましたあぁぁぁい……」
注文を聞いたじいさんが振り向いた、その瞬間！
「ふおぁっ！？」
足元に転がっていた麺棒を踏ん付けて転んだ！！　頭から転んだ！！　豪快に転んだ！
「だ、大丈夫ですか！？」
麗が心配そうに店主のじいさんに駆け寄る。
「麗、大丈夫そうか？」
漸も心配になったのか、心配そうに麗に近づく。　すると顔面蒼白な麗がこちらへゆっくり振り向いた。
「……死んでる！！」
――時間が、止まった。
「し、死んでるだと！？」
漸と胡弓が慌てて店主の脈を確認してみる、が脈はない。　……死んでる。
「ど、どうするの？　二人とも」
胡弓が涙目で二人に問い掛ける。
「ここは一度里の医者に……え？」
麗が話している途中、麗の顔が引き攣った。　二人が麗の視線の先を追うと、
「ふおおぉぉぉぉい……」
「うわっ！？」
死んだ筈の店主がむくりと起き上がっていた。　何事もなかったかの様に。　生き返ったのだ。
「お、お兄ちゃんこれって……」
麗が後ずさる。　胡弓も後ずさる。
「……」
そして漸は何を思ったか目の前で生き返っている店主を、おもむろに――
「ふおぁっ！？」

――突き飛ばした。　そして、店主は奇声を発しながら頭から転び、鈍い音が響いた。
「え！？」
「うそ！？」
二人は驚愕した。
「な、なな、なにやってるのーーっ！？　お兄ちゃん！？」
麗が漸の両肩をガシッと掴み、揺さぶる。
「いや、もしかしたらまた生き返るんじゃないかと思ってーー」
「そんなことあるわけないでしょ！？　奇跡が起きてたまたま生き返っただけかもしれないのに！！
神社所有者が人殺しなんて知れたらーー！」
麗がそう叫ぶ。
店主を見ると、死んでいる。、首が曲がってはいけない方向へ曲がっている……。　そこで今、ようやく罪悪感が出てきた五十嵐漸。
「ふおおぉぉぉい……」
「え？」
「ひっ！？」
突然麗と胡弓が漸の背中に隠れる。　見ると、死んだ筈の店主がまた起き上がっているではないか。
「な、何者だ、お前！？」
三人が後ずさりながら店主に叫ぶ。
「ワシの名前はぬっぺふほふ……非常にたやすく死ぬが、絶対に殺せない妖怪じゃ！」
じいさんがキリッとした表情で言う。　……妖怪？
「え？　そういう妖怪！？」
胡弓が驚く。　確かぬっぺふほふという妖怪は死肉で肉体を構成しており、非常に脆いが、すぐ生き返る。　よく死に、よく生き返る妖怪だ。
「よかったぁー。　じゃあ、お兄ちゃんが人殺しにはならないねぇ」

麗がホッと胸を撫で下ろす。
「よ、良かった……」
漸もため息をつく。
「団子……九つだったかのう？」
ぬっぺふほふのじいさんが三人に問い掛ける。
「あ、ああ」
そのあと、三人は団子を食べて神社に帰宅し、その日はゆっくりと過ごしていた。
翌日、あんな事が起こるとは知らずに――。

明けない夜

一一翌日、事は起こった。

「お兄ちゃん！　お兄ちゃん起きて！！　大変な事になってるよ！」
麗が慌ただしく漸を起こしに来る。　いつもと同じく兄を起こしに来る麗だったが、今回はいつもと違う。　顔の筋肉を引き攣らせ、強張った焦りや不安を含んだ表情。　その様子はただ事ではないと見れる。
「……ん？　どうしたんだ、麗」
まだ眠いからもう少し寝かせてくれ、なんて間抜けな言葉を言おうとしたが、麗の敵軍へ突撃する兵士の様に緊迫した表情で嫌な予感を感じ取る。
「お兄ちゃん、空を見て！！」
「空？　空がどうしたって……」
夏なのに雪でも降ったか？　と漸が縁側に出て空を見る。　すると見事な満月。　まるで餅の様な月だった。　なんだ、まだ夜中じゃないか。　普通の夜空なのに、麗は何を慌てているのだろうか？
空に妖怪でも飛んでいるのか？　とか思ったりするがそんな事は全くない。
「お兄ちゃん時計を見て！」
すると麗がズイッ、と時計を漸に突き付ける。　時計が壊れてるんじゃないか、と思った。　時計の指す時刻は一一午前８時。　本来なら太陽が昇っている時刻。
「朝だと！？」
だが、空は夜。　時計には異常はない。　時計は正確。　なのに今は夜。　これは普通に考えても解る。

「お、お兄ちゃん、これって……」
「ああ。　こんな異常な状況、間違いない……」
漸は苦虫を噛み潰した様な表情を浮かべ、
「これは、人間界になにかが起きている――」
空は夜なのに時刻は朝。　何故か待てど暮らせど夜は明けない。
しかも意識が覚醒してきて感じ取れる様になってきたが、空気に乗って異常なまでの妖怪の殺気が漂っている。　この異変は人為的か、それとも自然なものか？　これは誰が考えても解る。　こんな現象は流石のセカイの自然でも起きない。　いや、起こせる筈がない。　そうなれば答えは一つ。
――――能力者だ。

「麗、お前は神社の周辺に魔よけの札で結界を張っておけよ？」
「う、うん。　お兄ちゃんは何処に行くの？」
「里に行く。　この状況だから里が襲われてないか確認しないとな」
この空気中に漂う妖怪や悪霊の殺気。　ソレに刺激された妖怪達はほぼ必ず獰猛（どうもう）な猛獣の様に狂暴化するだろう。　そうなれば確実に里が襲われ、基本的に能力が無い人間の里は壊滅する。　なんかヤバい事になってるな・・・・、とこれからの苦労を考えため息をつく。
「じゃあ、留守番任せたぞ」
漸が麗の肩をポン、と叩き玄関へ向かう。　すると麗は心配そうに、　「気をつけてね？」　と一言。
「ああ、行ってくる！」
漸はそれに応じると、まるで陸上選手の様に夜の闇の中へと走って行った――。

――どうやら今の人間界は普段の夜よりも暗い様だ。
取り敢えず里の方角へと飛び出したはいいものの、予想を超える

闇に、提灯などの明かりも持たずに神社を発った物だから神社と里の間にあるちょっとした森で軽く道に迷っていた。　右往左往はまるで黒い壁があるのでは、と思う程の漆黒の闇で塗り尽くされており漸の方向感覚が狂っていたのだ。　くそ、こんなことならせめて提灯を持ってくれば良かった・・・・、なんて歯ぎしりするがもはや神社へ戻す事も出来ない。　一寸先も闇だった。　能力で闇を払っちゃうか？　と考えるが無駄に能力を使用する事は出来ない。

漸の能力は「神技を使う」能力で、自分と親しい神様の特徴を借り、それを神技に組み入れて使用する。　と言った物。　まあ、今の漸には親しい神様は一人くらいしか居ないのだが。　くそ、どうする！？　と焦っていると、

「……漸？」

近くの茂みから声が聞こえた。　力無く、怯えたような震えた声。

その声はいつも神社に遊びに来る鎌鼬の派生系の妖怪の、

「胡弓？」

緑髪のポニーテールに茂みに同化する様な花柄の黄緑の着物を纏い、身長が百三十くらいで楽器の胡弓を抱えて腰でも抜かしたのか、力なく座り込むその少女は、やはり胡弓だった。その姿を見て漸は「良かった、無事だったか」、と少し緊張の糸が緩む。　元々争い事の嫌いなの胡弓はこの空気中の殺気に触れても大丈夫な様。

「ぜ……っ、漸だよね……？」

すると、胡弓はまるで怯えた子犬の様に恐る恐る問い掛ける。

「ああ、そうだけど……」

そういえば何故胡弓はこんなにも怯えているのだろう？　空気中の殺気に怯えた？　いや、狂暴化した妖怪を見て怖くなったのか？

漸は頭の中で色々考えたが、今はそんな事より胡弓を保護した方がいいだろう。　と漸は胡弓の前まで歩き、彼女の目線辺りまでしゃがんで声をかけた。

「大丈夫か？」

「うっ・・・・ふぇええ」

すると、胡弓は漸に飛び付いた。　ドシッ、といきなり飛び付いてきたものだからバランスを崩して尻餅を着きかけるがなんとかバランスを保つ。　恐かったのだろう。　妖怪とは言え胡弓は子供。　しかも真っ暗な森に充満した殺気。　恐がるなと言うのが無理な話であった。　取り敢えずは胡弓を安全な場所に運ぶ必要があるな・・・・　と漸は胡弓を抱いて立ち上がる。

「ほら胡弓、ずっとくっついてたら動けないだろ？」

「うん……」

すると胡弓が漸から離れ、地面に置いてあった楽器の胡弓を拾い、抱える。

「なあ胡弓。　胡弓はどうしてこんな場所に居るんだ？　薬草の森が住家なんじゃなかったっけ？」

「……、」

漸の言葉に胡弓の表情が少し強張った。　まるで嫌な事を思い出した様な表情。　何かあったのか？　と漸は少し心配になる。　すると、胡弓が重い口を開き、言った。

「実は、いつもみたいに薬草の森で寝てたんだけど、突然そこに怖い妖怪が襲ってきて……」

胡弓の表情が見る見る内にいまにも泣きそうになってくる。

「そうか、解った。　じゃあ安全な場所に行こう。」

あ、ヤバい泣く！？　また泣かれたら妖怪とか寄ってくるんじゃないか！？　と漸は内心焦りつつ胡弓を宥める。　すると胡弓は頷き、泣くのは止まったみたいだ。　それにしても、何故妖怪である胡弓が襲われたのだろうか？　胡弓は妖怪としては未熟。　しかも考え方も性格も人間と近い。　そのため人間と勘違いされたのだろうか？

「安全な場所って、里？」

「ああ、里なら俺の知り合いが二人程居るからどちらかに匿って貰えば暫くは安全な筈だ」

「その人って、怖くない……よね？」

すると胡弓が不安げな表情で子犬の様に首を傾げる。
「大丈夫だ。　悪い奴じゃないさ、じゃあ行こう」
「うん」
　漸の言葉に安全したのか、胡弓の表情が真っ暗な場所を小さな光で照らした様に少し明るくなる。　そして、二人は（恐らくだが）里の方角へと歩きだす。　ずっとここに居たら妖怪に襲われた場合かなり危険だ。　妖怪である胡弓が襲われる確率は低いと思うが、今の環境ではそれも確信出来ない。　漸は早く此処から立ち去りたかったのだ。　だが、そういう訳にもいかない様。
「人間……みーつけた―。」
「……！」
　何故なら、二人の背後には既に一人の妖怪が見えない所から近づいていたからだ。
「何処だ！？」
　背後から聞こえてきたその声に漸が一喝する。だが、周囲には漸の声が山彦の様にこだまするだけ。　一瞬、幻聴かと疑うが胡弓が漸の服の袖をギュッ、と握りしめ前方を怯えた様な目で見つめる。
　まるで、前方には誰かが居るかの様に。
（――どうやら、幻聴ではないみたいだな。）

　漸は身構える。　妖怪の視力は人間よりも高い。　胡弓には見えているのだろう、前方から迫って来る妖怪が。　向こうからは見えるがこちらからは見えない。　まるで監視カメラで覗かれている様な嫌な感じ。
　暫く前方を睨む様に見ていると、目が馴れてきたのか少しずつ見える様になってきた。　すると、前方からこちらへ向かってくるモノがようやく確認出来た――。

人喰い

「……」

小さな女の子。　身長は１４０センチあるくらい。　目は血の様に紅く肩辺りまで伸びる白髪は、雪の様に白い。　そして白色の上着を纏い、白色の足元まで伸びるカーテンの様なスカート。　一見可愛らしい子供だが、普通の子供とただ一つだけ違う点が一つ。

（くそ、厄介そうだな……）

それは、妖怪特有のベタリと蛞蝓がへばり付いた様な纏わり付く様な殺気。　それも尋常ではない。　こんな小さな下級妖怪が持っているモノとは違う。　周囲は静まり返り、接近してくる少女が歩く度にパキ、パキリと音を立てる草や枝。　まるで死神の様に思えた。

「ねぇ、男の人の方は人間だよね？」

白い少女が漸へ密かに微笑み、問い掛ける。

「……だったらどうする？」

「食べる。」

即答。　やっぱり人食いか、と漸は自然と身構える。　鬼子だろうか？

「俺はお前なんかに構ってる程暇じゃないんだが？」

「しらないよ、そんなこと」

白い少女が小動物の様に首を傾げ無邪気に微笑む。　ゾワリ、と悪寒が走る。

「ぜ、漸……」

すると漸の背後の胡弓が涙ぐんだ声で言う。

「ああ、こいつはすぐに倒すからどこかに隠れてろ。」

それに漸は胡弓の頭をポンポンと撫でる様に叩く。　心配するな、と。
「あれ？　逃げないんだ」
白い少女は意外そうな声でそう言いながら
「じゃあ、すぐに食べれるね」
と、漸へ向かって走り出した。
「！　胡弓、先に里まで逃げてろ！！　俺はこいつを倒すから！」
「う、うん……！」
胡弓が漸の逆方向へと走ってゆく。　取り敢えずはこれで、他人を巻き込まずに戦える。　漸は接近する少女に、素早く袖の中からお札を数枚取り出し、投げる。　それはまるで手裏剣の様に回転しつつ、弾丸の如く敵へと襲い掛かった。

「当たらないよっ！」
少女は両手を前方へ突き飛ばし、そこからまるで鮮血の様な鮮やかな色のアメーバの様に不安定な形の妖力の光線を放つ。　そしてそれは、手裏剣の様に襲い掛からんとするお札をことごとく焼き払い、そのまま漸へと襲い掛かる。　だがこれくらいでやられはしない、と彼は横へ大きく跳び、ソレを回避する。　すると宙を斬ったソレは、背後の木に命中し、木の幹をまるで映画でよくある火の光線などで鉄を切り裂いたかの様に切り口は溶け、真っ二つに切断されていた。　思わず息を飲む。
――こんな小さな下級妖怪が、何故こんな破壊力を持ってるんだ？　と疑問を抱く。　普通なら木の幹が焼け焦げる程度が妥当な攻撃だ。　だが、そうではなかった。まるで切り口は焼け爛れた皮膚の様にぐにゃりと曲がり、それがもし俺に当たったら――？　と漸は背筋が凍った。　今更ながら、後悔する。　なんでいつもこんなヤバい相手ばっかなんだよ！？　って心の中で叫ぶ。
（――ああ、解ってる。　解ってるんだ。　こいつがこんなに強力な力を持つ理由は）

漸は悪魔の様な少女をキッと睨み、目を離さない様にして構える。
どんな攻撃がきても対処出来る様に。　今のこいつは狂暴だ。
それは今空気中に漂う妖怪の殺気。　それにあてられて力が狂暴化したのだろう。　だとすれば、ただの雑魚同前の最下級妖怪もかなり危険だ。　里に居る二人の自警団じゃあ防衛しきれないだろう。
里を助けるには、まずはこの悪魔を倒すしかない。
「――やるしかないな」
漸は、白い悪魔へと爆発的に駆け出した。

白い悪魔

「わざわざ食べられにきてくれるんだ？」
悪魔は凍りつく様な無邪気な笑みを浮かべ、目の前から全速力で突っ込んで来る漸へ迎え撃つかの様に走り出す。
「……！」
一瞬。　悪魔は一瞬にして約十メートルの漸との距離を詰めた。
それと同時に漸は咄嗟に回転する足にブレーキをかけるが直ぐには止まらない。
「いただきま～す」
「……っそ！！」
悪魔が口をワニの様にガバッと開き、噛み付かんとした瞬間、漸は咄嗟に右掌を悪魔のこめかみに薙ぎ払うかの様に打ち込んだ。
すると白い悪魔は小さく悲鳴を上げ、頭から地面へ吸い込まれてゆき、強打。
ドシッ、と鈍器が地面にたたき付けられる様な鈍い音、それが周囲に響き渡る。
「っぁう゛……」
すると白い悪魔は頭を痛そうに抱え込み、フラリと立ち上がる。
そして、漸を睨む。　恨めしそうに。　確かな殺気を込めて。
「……」
背中に嫌な汗がじわりと浮き出ているのが解る。　後方から流れて来る生暖かい風が氷の様に冷たい。　こんなに子供が恐ろしく感じた事はないだろう。
「もう怒った……絶対に食べてやるもん！」
瞬間、目に違和感を感じた。　視界の端が、黒い。
「な……ッ！？」
するとそれはまるで、和紙に墨汁が染み渡るかの様にどんどん黒

くなってゆき、十秒も経てば、完全に視力が奪われていた。
「なんだこれ……？！」
この時、脳裏に一つの単語が過ぎった。「能力者」。
そう、この少女は空気に乗った殺気に触れ、単に狂暴化しただけではなかった。
本来未熟な妖怪には無い、能力という武器も開発されていたのだ。
漸の脳内に警報が響き渡る。逃げろ、と。このままだと死ぬ、と。だが視界が無ければ逃げるは愚か、敵の居場所すら解らない。
「これで、ゆっくり食べれるね」
「ッ！！」
背後から無邪気な声。それに漸は反射的に振り向き、両腕を盾にガードの体勢に入ったが、遅い。
「まずは弱らせるけどね」
「ッか……っ」
後頭部に激痛が走る。まるで灰皿で頭を殴られた様な鈍い痛み。
一瞬よろける。
「っ……光神！」
だが漸は地面を踏み勢いよく締め、その反動でバネの様に起き上がり、右手から強く、神々しい金色の閃光を放った。

「なにしてるの？」
その瞬間背中に強い衝撃が走り、漸は声を上げる間もなく吹っ飛び、地面にたたき付けられる。既に悪魔は背後に移動していたのだ。やはり視界が無いと攻撃すら当たらない。正直この状況に絶望するが、まだ策はある。そう、命を賭けた一か八かの賭けが。
身体は、動かない。まるで身体が石になったかの如く。流石に妖怪の攻撃をモロに二激も、しかも急所に受ければ無理もないだろう。だがこうしている間にも白い悪魔は歩いて来る。死神の足音の様だ、とも思えるだろう。漸の脳の警報が鳴り響く。しかし、身体は動かない。しかも悪魔は既に、横に居る。だが、一

か八かの賭けを行う条件は揃った！！

「ありゃ？　もう終わり？　あっけないなぁ」

白い悪魔は無邪気に笑う。　可愛らしくも畏ろしく。　彼女は既に勝利を確信しているだろう。　だが、それが１番の隙となる。

「じゃあ、いただきま～す」

少女が漸の頭をわしづかみにし、噛み付こうとした瞬間。

「っ……ぉぉぉぉぉ！！」

動かない身体を無理矢理動かし、少女の頭をガシリと掴んだ。

身体がミシミシと悲鳴を上げるがそれどころではない。　これが一か八かの賭け。　大きな隙をつき、一撃で倒す。

「え、えぇ……？」

白い悪魔は突然動き出した漸に驚き一瞬硬直する。　こういう所は子供みたいだ、と思う。　そして、漸は歯を食いしばり、右手掌を振り上げる。　すると少女の表情は驚愕へと変わった。

「ガキは……寝てろ！！」

何故なら、漸の右手掌には、妖怪の動きを封じるお札が貼られていたのだから――。

「う、っ……わあぁぁ！？」

そして、漸の右手掌は、悪魔の眉間へとたたき付けられ、お札が張り付く。　そして少女は言葉にならない悲鳴を上げ、数メートル程吹っ飛び、地面にたたき付けられた――。

夜の里

「くそ……」

ぐにゃりと歪む視界の片隅。　そこには気絶した白い鬼子の悪魔。
――なんとか退けたか……　と少し安心するがまだ気は抜けない。
全身から悲鳴が上がっている。　予想以上にダメージが大きかったらしい。
こんなところで倒れれば、意識を取り戻したこいつに食われるかその他の妖怪の餌食になるだろう。
「……」

だが、身体が言うことを聞かない。　膝がガクンと地に吸い込まれる。
視界もモザイクが掛かって来ている。　――無理か？　そう心の中で呟いた瞬間、彼の意識はブツリと途絶えた――。

（――どうやら俺は運が良かったみたいだ）

彼はベッドの中で呟いた。　漸はあの時、意識が途絶えた直後に胡弓が現れ、里の建物に運んで貰っていたのだ。　そして現在、奇跡的に生きている。　もしあの時胡弓が戻って来なければ間違い無く死んでいた。　そう思うとゾッとする。
（とにかく、助かった……）
そして漸は部屋を見渡す。　木造の平家のその一室には本や巻物が乱雑としておりまるで引きこもりの部屋みたいだと思う。　窓を

見れば相変わらずの見事な満月。　ここで漸は当初の目的を思い出した。

「そうだ！　事件を――」

「おっ、起きたか」

漸がガバッと起き上がった瞬間体中の傷口にまるで傷口が湯に浸かった時の様に痛んだ。　「～～～！！」それにプルプルと悶えていると、部屋の襖が開き、一人の男が入ってくる。

土の様な茶色の髪に動き易そうな着物を纏った男性。その男の背中には一本の刀がかけられている。

それを見た漸は「ああ、光輝の部屋だったのか？」　と少し安堵した様な表情を見せる。　彼、神下（カミシタ）　光輝（コウキ）は漸の友達の一人の人間で、妖怪に対して絶大な威力を誇る、妖斬刀という刀の使い手でありこの里に二人しかいない自警団の一人でもあった。

「なんだ、とは何だよ。　ま、取り敢えず大丈夫そうだ！　」

光輝が笑う。　こいつは今の人間界の状況でよく笑えるな、と漸は呟く。

まあ、明るいのが光輝の取り柄なのだが。

「おっと、忘れる所だった、お前を運んできた胡弓って奴が心配してたぞ？」

「胡弓が？」

そういえば胡弓は何処だ？　漸は光輝の後ろへ首を伸ばすが見当たらない。

あれ？　おかしいなぁ、と首を傾げると　「いい加減気付いて……」　背後からの幽霊の様に恨めしそうな声。　振り向けば、やはり機嫌を悪そうにまるで風船の如く頬を膨らませた胡弓。

どうやら枕元にいた様だ。　うわっ、気づかなかった！　とか言えば怒らせそうなので口には出さない。

「えーと、胡弓が運んでくれたのか？」

取り敢えず話をそらす。

「うん、死にかけてたからビックリしたよ。　漸、身体は大丈夫そう？」
「流石に動き回ったりは出来ないな。　……あ」
ここで漸は思い出した。　この里の入口に魔避けの結界を張るという目的を。
「そうだ、結界張らないと！」
漸は鉛の様に重い身体をゆっくりと上体を起こし、起き上がる。
「え！？　動いちゃ駄目だよ！」
「いや、でも結界を張らないとなぁ……」
今の人間界の状態だとここもかなり危険だ。　だったら少し無理をしてでも結界を張った方がいいだろう。　と、漸はゆっくりと起き上がった。
「あ、結界は後な。」
すると、光輝が口を開く。　どういうことだ？　と漸は首を傾げると、光輝は答える。
「いや、さっき里に妖怪が一体侵入したらしいんだ。　だから、まずはそいつを倒して安全確保してからの方がいいと思う。」
光輝の言葉に胡弓の表情が突然不安になる。　その様子を見た光輝が腰の妖斬刀に苦笑いで手を掛ける。
「……解った、じゃあ光輝はその妖怪を倒しに行くのか？」
「うん、取り敢えず漸と胡弓はそこで待機って事で！　んじゃ、行ってくる！！」
光輝は漸の質問に答えると、じゃ、と手をビシッと上げて風の様に部屋を飛び出して行った――。

――家を飛び出した光輝が里の大通りを走りながら辺りを見渡す。
周りの家はまるで台風の来る直前の地域の様に頑丈な板が打ち付けられており、皆家の中に潜んでいる様。　この事件も早くどうにかせねばとんでもない事になるなぁ、と一人呟く。
「えーと、確か妖怪が侵入してきたのは北側だったっけ？」
そして光輝は前方、大通りの奥に見える門に目を向ける。　そこには一人の女性と妖怪が戦っている光景。　腰までは伸びているであろう長い薄紫の髪に白い花の髪飾り。　そして白い花が描かれた着物には天人を思わせる蛇の様に長い、一枚の布の様な羽衣が両肩に巻き付く様にくっつき、宙に浮いていた。
彼女は、天人である。
光輝と同じ里の自警団の天人。　名前はナーシン。

「とにかく、加勢に――」
光輝はさっさと加勢した方が早いだろう、と駆け出した瞬間。ナーシンと対峙していた妖怪が倒され、彼女は光輝へ振り向き、
「あと三体程周辺に居る、一気に潰すぞ！！」
叫び、門の向こう側の墨染めの様に暗い闇の中から現れる三体の鬼の様な形相の男の妖怪。
「よし、さっさと片付けるか！！」
そして、光輝とナーシンは妖怪へ向かって走り出した――。
「光輝、私は二体を相手にする、お前は少し大きい奴を相手にしてくれ！」
ナーシンが叫び、三体の妖怪の内小柄な二人組の妖怪へと走り出

す。　それに光輝は　「了解っと！」
　と腰に着けている刀の鞘から一本の刃を引き抜き、目の前の岩石の様にゴツゴツした男の妖怪へと走り出した。　恐らく相手は硬いだろう、と光輝は思う。
「タダのニンゲンが妖怪に勝てると思ってんのか！？」
　すると岩石の様な妖怪はニタァ、と薄気味悪い笑みを浮かべ、巨大な血と固い肉が詰まった拳で光輝へ殴り掛かる。　だが、光輝は特にどうしたという様子も見せずに刀を構える。　その表情は余裕以外の何でも無かった。
「人間じゃなくてお前は武器に注意すればいいんじゃないか？」
　光輝が一言。　そして迫り来る岩石の拳へ刀を大きく横へ、木々を切り付けるかの様に切り裂いた。
「っがぁぁぁぁあ！？」
　瞬間妖怪は悲鳴の様な叫び声を上げた。　何故なら、その妖怪の鉄の様な腕は、まるで段ボールをカッターナイフで切り裂いたかの様な切り傷が出来ておりそこからは、鉄臭い液体が流れていたからであった。
「な〝〝なんでそんな刀に俺の腕が斬られんだよ……！？」
　信じられない、といった目でそいつは後ずさる。
「確かに、普通の刀じゃあ斬れないよなぁ、お前みたいに硬い妖怪は」
　普通の刀では簡単に弾かれ、刃こぼれするだろう。　だが、この刀はそんなの関係ない。
　妖力を含む物質ならば、ほぼ全て問答無用で切り裂く事が可能な刀、「妖斬刀（ようざんとう）」であるから。
「まぁ、相手が悪かったって事で。」
　光輝がニヤリと笑う。　すると妖怪は身体をわなわなと震わせ、叫ぶ。
「ふ、ふざけんなぁ！！」
　再度そいつは光輝へハンマーの様な腕を振り下ろす。　まだ斬ら

れていない腕で。
「効かんっ！！」
一閃。　向かって来た腕を切り裂く。
「ギャァァァ！！」
勿論刃は腕を切り裂き、飛ばした。　そして光輝はすぐさま駆け出し、敵の懐へ潜り込み――
「悪いけど、里に侵入して来なければ斬られなかったと思うぞ？」
大きく縦に、その妖怪を斬った。　岩石の様な身体は割れ、赤い液体が噴水の様に噴き出す。
そして、そいつは崩れ落ちた。
「よし、討伐完了！」
「そっちも終わったか」
光輝が刀を鞘に収めると同時に反対側からナーシンが歩いて来る。
彼女も無傷。　流石は天人と言った所か。
「それにしても……この異常現象が起きてから里に侵入する妖怪の数が増えて来てるよな」
光輝が軽くため息。　そろそろ疲れた、と呟く。
「まあ、妖怪が暴走しているから仕方は無いな。　一部の妖怪は影響を受けていないが、影響を受ける者が大半か。」
「胡弓とかが前者だな。」
光輝が呟くとナーシンがあ、と何か思い出した様な表情を見せる。
「そういえば、五十嵐がお前の家で寝ていると言うが、様子を見に行ってやればどうだ？　彼は今無防備だろうからな」
あ！　そういえば漸を匿ってたんだっけ！？　と光輝は提出日前日に手を着けていない課題の存在を思い出したかの様に立ち上がり、
「あぁ、忘れてた！　んじゃ、ちょっと行ってくる！！」
弾丸の様に、家のある方角へと走り去って行った――。

「相変わらず、落ち着きが無いな。」
そして光輝を見送ったナーシンはクスリと笑い一人、呟いた。

「漸、胡弓ー、今帰ったぞーー！！　生きてるかーー！？　死んでないかーー！？」

部屋の中に光輝が砲弾の様に騒がしく流れ込む。　その騒々しさから漸と胡弓は何事だと固まった。

「ああ、随分と騒がしいお帰りで」

「ビックリした～……」

そして二人は反応に困った様な表情。　いやいやいや、何故反応に困る！？　と光輝は一言。

すると二人は　いや、普通困るだろ。　と返答。

「……うん、まあ、二人の無事を確認した所で漸。　結界張るんだよな？」

取り敢えず光輝は余裕が無いので本題に入る。

「ああ。　少し遅くなるだろうけどな。」

漸は頷く。　怪我のせいで余り速くは出来ないだろうが、まずは里を安全にしなければ危険すぎる。　と漸は軋む身体を極力痛まないゆっくりと起こす。

「あー、そんなゆっくりじゃ時間掛かるなぁ。　よし、胡弓！　漸を担げ！！」

「えぇ！？」

私が！？　と胡弓は驚いた。　普通見た目的に光輝ではないのか？　と言い足そうに。

「いや、でも人間の俺よりも妖怪の胡弓の方が力はあるだろうし。」

それに、持ち上げられて床に近い方が作業もしやすいだろうし、と光輝は言う。　持ち上げたままで作業するのか？　と漸は顔をしかめた。

「まあ、そういう事で。」

「……仕方ないなぁ。」

すると、胡弓は渋々と首を縦に振り、結界張りの作業を開始することにした――。

薬草の森

「――よし、こんなモンか」
胡弓に担がれた漸が床に最後のお札を張り終える。　取り敢えずは里に結界を張り終え、これで妖怪は暫く入れないだろうと言う所だ。　そこで光輝は肩に刀を掛けながら
「で、漸は神社に送った方がいいか？」
問い掛ける。　今は休んで怪我を治せという事だろう。
「……やっぱり休んだ方がいいのか？」
当たり前、と光輝は一言。　だが、本当に休んでて大丈夫なのだろうか？　と漸は首を傾げる。
「ねぇ光輝。　薬草の森のあの人ならこの怪我でも治して貰えるんじゃない？」
漸を担いだ胡弓が光輝へ顔を向ける。　すると光輝はあー……、と納得した様に頷いた。
――あれ？　なんか俺話で置いてきぼりにされてる？　と漸は二人にこう質問した。
「なあ二人とも、あの人って誰だ？」
取り敢えず気になる点を質問。　二人は薬草の森に住んでいると聞いたが、薬草の森は名前のとおり様々な薬草が生い茂る森で、そこに棲息する薬草の八割が毒草である。　中には触れるだけで毒が回る草なんてのも存在し、妖怪すらも近寄らないそんな危険な場所に、人が住めるとは到底思えなかったのだ。
「なんだ、薬草の森に近い所に住んでるのに漸知らなかったの？
杷島（わじま）さんの事」
胡弓は意外だ、と言わんばかりの表情。　漸はやっぱり知らないな。　と首を傾げる。　するとここで光輝が口を開き、

「で、その杷島についてだけどさ。　そいつ、魔法使いなんだよ、人間なのに」
「……魔法使い！？」
　一瞬、聞き間違いだと思った。
「魔法使いって人間でもなれるのか？」
　確か、魔法は人間の脳では知識を詰め込むのは困難。　よって、基本的に人間では魔法使いにはなれないのだ。　それが常識だったから、人間の魔法使いが居るという事実はかなり衝撃的だった。
田舎から上京してきた人が初めてエスカレーターを見た時ぐらいに衝撃的だったのだ。
「っつーか、人間界の守護の一部でもある神社所有者なのにそういった情報知らないってのも可笑しくない？」
　すると光輝が鋭い指摘。　グサリと一言が突き刺さる。
「で、でもその薬草の森にこの状況で辿り着けるのか？」
「ん？　あー……」
　光輝が困った様に声を上げる。　漸を運ぼうにも、光輝が運ぶのなら光輝の手が塞がり道中敵に襲われたら一たまりもないからだ。
　胡弓は戦うとかが苦手みたいだから連れてはいけないし、ナーシンももしもの時に里を守れないから連れてはいけない。　どうしたものか、と二人は頭を抱えた。　するとその様子を見ていた胡弓が静かに手を挙げ
「じゃあ、私が漸を運ぶよ」
　二人は　え？　と声を上げた。
「光輝が漸を担いで動けなかったら妖怪に襲われた時危ないから私が漸を担いで行こうと思ったんだけど……ダメかな？」
　予想外の台詞だった。　争いが苦手な胡弓が自ら危険な行動をとろうとしている事に。
「こちらとしては嬉しいけど、どうして突然？」
　漸がそう問い掛けると、胡弓は落ち込んだ様に俯き、口を開いた。
「うん、あの時漸は私を巻き込まない様里へ逃がしてくれたよね？

そしたら漸があの妖怪に殺されかけてて一つ思ったのもしかしたら私も戦っていたら漸はこんな大怪我は負わなかったんじゃないかな、って」
胡弓が決心した様な表情で言う。　少しは負担を減らしたいと。
少しは役に立ちたいと。
「成る程ねぇ。　まあ、胡弓も一応妖怪だし連れても問題ないだろ。
おれも手が空いてたらいざという時動けるし」
光輝が刀の鞘を腰に掛ける。　取り敢えずはＯＫということだろうか。
「胡弓、大丈夫なのか？　」
すると漸は少々心配そうな表情。　胡弓はこういった場面に慣れていない。空気中に殺気が漂うという気候的にも胡弓の優しい性格にはきついだろう。　それに、漸が先程張った妖怪避けの結界。あれは結界内部に妖怪が居た場合、その妖怪には影響は無いが一度その結界から出てしまえばそれが解かれない限り二度と結界内には戻れない。　つまり、胡弓は里へ戻って来れなくなるのだ。　そうなると、胡弓が狂暴化した妖怪に人間と間違われて襲われるかも知れない。　神社も麗が俺と同じ結界を張っていた。　本当に大丈夫なのか？　と漸は心配する。　まるで妹を心配するかの様に。　すると胡弓はうん、と頷き、
「大丈夫、それに薬草の森は私の住み処でもあるし家に帰る様な物だもん」
微笑みながら言った。
「漸、大丈夫だ問題ない。　薬草の森に到着すれば俺の知り合いの魔法使いの家に胡弓を匿ってもらってその周囲を妖怪避けの結界で囲めばいいじゃん？　」
光輝が隣からそう提案。　すると漸はあ、成る程。　と納得。
どうやら光輝は胡弓の安全面の保障も考えてＯＫを出していた様だ。
漸の心配のヒモがあっさりと解ける。
「んじゃ、さっさと行きますか」

そして胡弓は漸を担ぎ、光輝が先頭となり家から薬草の森へと足っていった――。

やはり、薬草の森の中も暗かった。　周囲の木々は漆黒に塗り潰された様な森の中は数メートル先も見渡せない。　何処に毒草があるかも解らない状況。　一寸先は闇。　そんな状況下、光輝と胡弓は周囲を警戒しつつ足を進める。　もちろん会話は無い。　そんな沈黙の中を、胡弓に担がれた漸は切り裂いた。

「――なあ、ふと思ったんだけど」

「ん？」

「二人の知り合いの魔法使いってなんで、この薬草の森に住んでるんだ？」

漸の素朴な問いに胡弓がそれはね、と口を開く。

「薬草の調合の研究とかをしてるらしいから此処に住んだ方が薬草の採取が楽なんだって」

成る程、と漸は頷いた。　やっぱり魔法使いとかってこういった研究には熱心なのか、と感心する。　漸なら研究の為にわざわざ危険な場所に住んだりはしないだろう。

「あ、そういや漸にはまだあいつの名前言って無かったよな」

するとここで光輝。　そういえばまだ杷島という苗字しか聞いていない。　だが、それがどうかしたのだろうか？

「あいつ、下の名前が変わってるから自己紹介された時に笑わないでやってくれよ？　ちなみに、あいつの名前は琵琶子って言うんだ」

一瞬、湖が脳裏を過ぎった。

変な名前の魔法使い

び、琵琶子？
琵琶子ってまさかあの昔人間界に存在していた湖の、琵琶湖の事か？　それは確かに随分と変わった名前だ。　と漸は心の中で呟く。
すると光輝が念を押してもう一口、口を開いた。
「一応本人も少し気にしてるから、笑ったりするなよ？　もし笑ったら……殺されるかもしれない」
恐ろしいモノを見た様な表情で言う。　そんな光輝の額には汗が滲み出ている。　それを見て、絶対に笑わない様にしようと漸は決心したのであった。

「あ、見えてきたよ」
すると胡弓が一言。　見れば前方に仄かな光りを放つレンガ造りの家。　あれが琵琶子という魔法使いの家なのだろうか？　三人が家の前までたどり着くと、突然光輝が
「よし、じゃあちょっと待ってろ。　今居るか確認するから」
そう言い玄関の扉へと走り出し、扉をノックする。
「おーい、琵琶子ー。　居るかー？」
光輝が呼び掛けても家の中から返事は無い。　まさか、留守か？
と光輝は首を傾げる。
その時だった。
「はいはーい、ちょっと待ってー」
ああ、良かった返事があった。　留守では無いみたいだ。　取り敢えずは助かる、と漸は安堵のため息を吐いたと同時に木の扉がギ

ギギ、と軋んだ音を立てながらゆっくりと開き、中から一人の女性が顔を出した。　腰まで伸びる栗色の髪には石の様な形の帽子。そして後ろ髪は所々リボンで結ばれており、肩が露出した長袖のクリーム色の、魔法使いを思わせる洋服に同じ様にクリーム色の長いスカートを纏った女性だった。　随分と変わった服装だな、と漸は心の中で呟く。

「どちら様――って、あ、光輝？」

「よ、琵琶子久しぶり」

光輝が軽く手を挙げて挨拶。　どうやら彼女が琵琶子の様だ。

「どうしたの？　こんな異常気象の真っ只中、胡弓ちゃんに……神社の人まで？」

ここでようやく琵琶子が漸の存在に気付き漸の身体に巻かれた包帯を見、状況を理解した　という様な表情で　成る程ね　と一人頷く。

「ああ。　こいつ、俺の友達の神社所有者の五十嵐　漸って言うんだけどさっき妖怪と戦って怪我したから治してほしいんだ」

光輝の言葉に琵琶子は驚いた様な表情を浮かべ、漸へ顔を向け

「え？

この人妖怪と戦ったの！？　今の妖怪は危険なのによく勝ったね～」

「いや、一応事件解決の役目もあるし……」

「え？　事件解決の為に動いてるの？　だったら尚更治さないとね」

すると琵琶子はちょっと待ってて。　と立ち上がり、家の中へと戻って行く。　そして、数秒後には一冊の魔法陣が表紙の事典並に分厚い漸には読む気にもならない様な本を持ち出してきた。

「琵琶子、それって……」

魔法に関する本？

「うん、　魔導書。　私はこれがあった方が呪文の詠唱が上手く行くんだよね」

琵琶子が頷き、パラパラと本のページを手慣れた手つきでめくっ

てゆく。　そして、しばらく本とにらめっこしてから彼女はよし、と一言。
「じゃあ五十嵐君。　今からあなたに回復魔法を掛けるから極力動かないでね？」
「解った」
　彼女が微笑み、漸へ右手を翳す。　すると漸の周囲が青く光ったかと思うと、青い宝石の様な綺麗な輝きを放つ青い魔法陣が漸を囲むかの様に現れていた。　その魔法陣が放つ輝きに暫し見とれていると、身体の傷の痛みが徐々になくなっていっている事に漸は気付いた。
「回復魔法ってこんなに早く効くのか！？」
　と漸が予想を超える効力に驚いている内に体中の傷は修復されていた。　すると傷が癒えた事を確認したかの様に魔法陣は小さくなってゆき、収束。　そして琵琶子はうん、と頷き本を閉じ
「はい。　これでよし、と」
「ありがとう。　琵琶子」
「どういたしまして」
　取り敢えずは怪我は治った。　これでまた調査を続ける事ができるだろう。
「ねえねえ五十嵐君。　そういえばこの事件の元凶について、何か解った事はある？」
　漸が　よかったー。　と立ち上がると同時に、琵琶子が好奇心旺盛な子供の様に興味津々、といった表情で漸にズイッと顔を近づける。　え？　なんか興味持たれた？　と漸は内心驚く。
「今のところ進展は無いけど、どうして突然？」
　漸の言葉に成る程ね～。　と琵琶子は頷き、
「じゃあ今宵の森の異常にもまだ気付いていない訳だ？」
　その言葉はこの事件を解く鍵な様な気がした。
「え？　琵琶子何か知ってんの？」
　すると意外そうな顔を見せる光輝。　それに彼女は首を縦に振り、

漸に視線を戻した。
「いかにも教えてほしそうな表情だね。　教えてもいいけど条件付きでどう？　」
と　彼女はそう微笑んだ――

「――え？　同行？」
――あれから半刻が経過した頃、漸は鳩が豆鉄砲を喰らった様な表情で口を開いた。　漸が何をそんなに驚いたかと言うと、琵琶子が出した条件。　それはこの事件の調査に同行したい、との事で漸が想像していた条件とは全く違う事に驚いていたのだ。　情報料を払えとか言われるのかなー、とか想像していたのだから同行させてくれ　というのはかなり予想外である。　何故、わざわざ危険な調査に同行したいんだ？　と漸は困った様に彼女に問う。　すると彼女は個人的な興味、かな？　と首を傾げながら答えた。
……興味本位くらいの感覚の人を危険な場所に連れて行ってもいいのだろうか？　漸は一瞬そう悩んだが、次の光輝の一言でその悩みは消え去った。
「漸、琵琶子は興味を示したモノには命を掛けてでも調べ上げるから大丈夫だぞ　」
どれだけ探究心が強いんだ、と思った。　それはつまり、気になる事は命懸けでも調べると。　そして、彼女にとって興味本位は命懸けなのであるという事だろう。
「それに、また一人だと大怪我した時に今度こそ死んじゃうかもしれないよ？」
琵琶子が鋭い一言。　確かにそうかもしれない……。
「なんなら光輝もついて行っちゃったら？」
すると胡弓も一言。　その一言に光輝は成る程！！　と乗り気である。　こうなったら断っても意味が無いだろう。　逃げても無理矢理ついて来るだろうと安易に想像出来た漸は空気が抜け出した風

船の如く盛大にため息をつき、
「解った。　もう好きにしろ」
　正直関係ない人を巻き込みたくはないが止めても無駄という気もするし、二人はかなり戦力になるだろう。　漸はその点ではありがたいと感じていた。　そんな三人が騒ぐ中、話からあぶれた胡弓が楽器を抱えながら
「ねぇ、琵琶子さんにお願いがあるんだけど」
　すると琵琶子は　ん？　と胡弓に顔を向ける。
「この事件が落ち着くまで、琵琶子さんの家に隠れててもいい？」
「うん、別にいいよ。　でも、一人で大丈夫？」
　琵琶子はまるで妹を心配する様な表情。　それに胡弓は　「私はこれでも一応妖怪なんだから、大丈夫！」　と胸を叩く。　その胡弓の反応に琵琶子は安心した様な目で　解った　と一言、微笑んだ。

今宵の森

「よし、これでいいか」
漸が地面にお札を張り付け、呟く。　見ればお札が琵琶子の家周辺を囲む様に張り付けられ、結界が張られていた。　この結界は里に張り付けた物と同様、妖怪が外部から侵入または内部へ出る事が出来なくする効力を持っている。　そしてその結界内には緑髪のポニーテールに緑の和服の妖怪の少女、胡弓が一人。
胡弓は戦う事が難しい。　なのでこの結界は、そんな彼女を守る為に張っていたのである。　取り敢えずこれで胡弓が狂暴化した妖怪には襲われずにはすむだろうと漸は一安心。　だが、この結界により胡弓はこの周辺に閉じ込められた事にもなる。　なるべく長い間閉じ込めたくはない。　とにかく火急的速やかにこの事件を解決せねばなるまいと漸は決心する。
「胡弓、早めにこの事件は解決するからそれまで大丈夫か？」
「うん、大丈夫。　結界張ってくれてありがとね」
漸の問いに胡弓は笑顔で返答。　正直大丈夫とは言えない。　だがこの状況で大丈夫じゃないと言っても漸を困らせるだけ。　それが解った上で大丈夫と答えたのだろう。　胡弓は妖怪の中で1番優しいのではないかとも思った。　そんな普通の人間よりも気を仕えるであろう胡弓に漸は感謝しつつ、琵琶子へ顔を向け
「琵琶子、早速だけど今宵の森がどうとかっていう……」
本題に移る。　今宵の森の異常についてである。
「うん、確実な情報とは断言出来ないけどね。　この事件が起きてから今宵の森方面からかなりの魔力が放出されてる様なの」
「魔力が？」
――今宵の森。
それは森全体に夜の魔法が掛かっている森で、森に一歩足を踏み

入れると森の内部は夜になっているという森だ。　外部からの光は全て月の光に変換され、明かりがなにもない森。　そんな風景から今宵の森という名前が着いている。
「で、その今宵の森から魔力が放出されてるってどういう事？」
　すると近くの切り株に座っていた光輝が腕を伸ばしながら琵琶子に問う。　それに琵琶子はうん　と頷き話を進める。
「魔力が放出される理由は一つしかないね。　今宵の森に掛かっている魔法が暴走して、その魔力が人間界全体に……って具合でね」
　それなら納得がいく。　確かに今宵の森の魔力は無尽蔵。　そんなモノが暴走して夜の魔法が漏れ出せば人間界全土に広がったとしても何らおかしくない。　それ程に莫大な魔力を蓄えた森なのだ。
　だが問題は何故魔力が暴走したのか？　それだけが解らない。
「……、」
　自然的に魔力が暴走する様な事は起きないだろうし妖怪や悪霊の能力でも力不足。　一体何が起きたというのか？
「……こればかりは行って確かめるしかないか」

　――暗い。　三人はその森に踏み入れた瞬間思った。
　森の中は外よりも更に闇が深く、提灯の明かりでも足元を確認するのがやっとという暗さである。　人間界の幻神神社より東に位置する　今宵の森。　三人はそこへ足を踏み入れていた――。
「でも、確かにこの森は外よりも殺気や妖気が濃いな」
　漸が真っ暗な周囲を見渡し、呟く。　ここまで暗いと妖怪に背後を取られてもおかしくないな、と気を引き締める。　それと同時。
　重苦しい空気の中、妖斬刀を肩に掛けながら歩く光輝が口を開いた。
「というか琵琶子さ、魔法で明るくしたりできないの？」
　その質問に琵琶子は　あ。　と口を開く。　忘れてた様だ。

「そういやそうだね。　忘れてたよ」
そう言うと彼女は手を空へと挙げぶつぶつと聞き取れない音量で呪文の様な言葉を呟き始める。　そしてその瞬間彼女の挙がった右掌からはゴルフボールくらいの小さな光の球体が現れ、強い光を吐き出す様に放出した。
「うわっ！？」
あまりにも突然に強い光が目に突き刺さり、咄嗟に目を腕で覆う。
これって至近距離で直視させたらそれだけで武器になるんじゃないだろうか。　だがその光のお陰で周囲は明るくなり景色も見渡せる様になった、筈だった。
「って、何コレ！？」
周囲の景色を見てまず口を開いたのは魔法使いの琵琶子だった。
まるで不意打ちを受けた様な表情。　驚くのも無理はない。　何故なら三人の周囲には黒い壁が四方八方にそびえ立ち、逃げる事が出来なくなっていたからであった――。

「なんだ……？　この壁は……」
三人を囲むまるで檻の様な黒い壁の中、身構える。　いつの間にこの壁は現れた？　これは妖怪の仕業か？　それとも暴走した魔力が原因か？　三人は頭の中で考える。　ちょうどその時だった。
「やっと壁に気付いたか」
――声が聞こえた。　男性の声だろうか。　だが周囲にそれらしき人物の影すら見当たらない。
「何処だ！？」
漸が闇に向かって叫ぶ。　すると直ぐに返事は返って来た。
「悪い事は言わない。　お前達、今すぐ帰れ。　この森は危険だ」
質問に答えるつもりは無いらしい。　だが、折角動きを封じた獲物に帰れとはまさか妖怪ではないのだろうか？　それは解らないが今言える事は一つ。　帰るつもりは無いという事。
「忠告してくれるのはありがたいが、俺は神社所有者としてこの事

件を解決しなくてはならない！　だから帰る事はしない！」
今帰るとこの事件は解決しない。　それはすなわち狂暴化した妖怪達に人間界を壊滅させられる事にも繋がりかねない。　だから今引く訳には行かないのだ。
その叫びに
「成る程、お前は神社所有者か」
意外そうな声。　それと同時に突然、上空から黒い影が地上へ降りてきた。　影は人型。　声の主だろうか？
「誰だ？」
光輝が首を傾げる。　取り敢えずは人型の何かというのは解る。
三人がその影を凝視していると、ソレは立ち上がりこちらへと歩いて来た。
「！」
それに身構えるが、向こうからは殺気などは感じられない。
「身構えなくとも、攻撃はしない」
するとその影は言う。　敵意は無いと言うのだろうか？　そんな事を考えている内に、影は琵琶子の魔法の明かりに照らされ姿がはっきりとうつっていた。　少し長めの黒い髪の長身の冷静そうな落ち着いた顔つきの男性。　服も闇に溶け込む様な着物を纏い、腰には人一人くらいの長さはあるであろう太刀を掛けている。　一瞬妖怪か人間か解らなかった。　だが、彼からは確かな妖力が感じ取れる。どうやら妖怪の様。　でも狂暴な気配は無い。　彼は胡弓と同じ様にこの殺気で満ちた空気に感化されなかった様に思えた。
「誰ですか？」
そんな彼に、琵琶子は恐る恐る質問する。　ちょっと予想外の質問だったのか彼は一瞬動きが止まったが、質問には答えた。
「俺は夜叉。　妖怪だ」
「その妖怪が何故俺達を追い返そうとする？」
一言、漸は問う。　それに夜叉は涼しげな表情を一つと変えず

「お前達がここから先へ進んだところでどうにも出来ないだろう」
力不足　と夜叉は答える。　どうにも出来ない？　それはつまり、この事件の元凶がこの森に居るという事だろうか？　だったら力不足だろうと言われようが一度向かって判断するまで、と漸は肉のつまった拳を固く握りしめる。
「……引くつもりはない、か」
夜叉が軽くため息。　そして漸を真っ直ぐ見据え、腰の太刀に手を掛けた。
「どう引き止めようが先へ進むのなら、少々手荒だがお前を斬らせてもらう」
「……できるもんならな」
二人は身構える。　攻撃が来てもすぐに対応出来る様に。　そして、夜叉は漸の隣の男女へ視線をずらし
「そこの二人、これは一対一の勝負は余計な手出しはしないでもらいたいがいいか？　心配せずとも殺しはしない。　それなりに手加減はする」
その問いに二人は頷き、離れる。　何となくだが夜叉の言う事は信用出来る。　相手は妖怪だが、正々堂々としているからだろうか？　なんにせよ、彼は嘘をつくことはないだろう。
「さて、そろそろ始める。　もしも俺に勝てたなら元凶の居場所は教えてやろう」
そして夜叉が太刀を鞘ごと手にとり構え、戦闘が開始された――。

夜叉

「……、」

戦闘が始まり早5分。　静寂の中、二人は構えたまままるで静止画の様に微動だにしていなかった。　そんな様子を離れた場所から眺めながら琵琶子はなんで動かないんだろ？　と首を傾げる。　それに光輝が腕を組みながら

「もしかすると、あの夜叉って妖怪は居合斬りを仕掛けているのかもしれない」

と少々険しい表情。

――居合斬り。

それは刀を鞘にしまい構え、その刀の刃の攻撃範囲に入った瞬間に敵を一瞬で斬るという剣技である。　そして、その光輝の予想は当たっていた。　夜叉は居合いを狙っている。　また、漸もそれに気付き下手に手を出せない状況だった。　この墨を塗られた様な壁を出現させた能力者だ。　どんな力かも解らない中下手に手を出す事が出来ず、石像の如く停止している。　そんな周囲を静寂に支配されている中、沈黙を切り裂いたのは夜叉だった。

「いきなり突っ込んで来る様な奴ではないか」

ふむ、と夜叉は呟き黒く長い鞘から鋼の刃を抜き払い、

「掛かって来ないのならば、こちらから掛かるまで」

地を蹴り、まるで突風の様に風をきり漸へと駆け出した。

「まずは一手」

互いの距離は約十メートル。　その距離を夜叉はほぼ一瞬で詰め、長い太刀を棒切れを振り回すかの様に軽々と振り上げて漸へ斬り掛かった。

「っ……！」

（――速い！？　）

漸は夜叉のその速度に一瞬怯み、逃げ遅れる。　そして、夜叉が今にも振り下ろさんとする太刀、刀の刃に先程琵琶子の放った魔法の光源が反射しギラリと光った所で身体の反応が追いついた。
――ヤバい。　漸は真っ先に思う。　それと同時。　漸は転がり込むかの様に横へ跳びかろうじて刀の縦の斬撃を回避。　掠めた刃により右腕の袖がパックリと口を開き、生暖かい風が入り込む。
「あ、危ねぇ……」
斬れた袖をチラッと見、冷や汗を流す。　妖怪の力で太刀の斬撃なんて直撃したら人間の身体など豆腐を斬るかの様にいともたやすく切断されかねない。　そう思うと今避けられた事に感謝する。
「休んでいる場合か？」
そんな事をしている間に夜叉は直ぐさま太刀を横へ一閃。　漸は咄嗟に身体を地へ伏せてギリギリの所で太刀の一振りを回避して夜叉の反対側へと転がり、立ち上がった。　――この勝負は長引かせれば体力で負ける！　そう直感した漸は、なるべく速やかに夜叉を倒そうと右手を前に突き出し構える
「――光神！」
漸が唱える様にそう叫ぶと、彼の構えた右手は神々しい光を放ち出しそして、その右手からは一本の光の槍が夜叉へ向かって放たれた――
「！　」
夜叉は瞬間的に太刀を横へ振るい、光の槍を刃で弾く。　そして漸へ駆ける。
（くそ、槍状がダメなら……！）
それに漸はすぐさま身構え右手を迫りくる夜叉へと突き出し、
「光神！！」
能力で光神を放つ、がそれは先程の光の槍ではなくアメーバの様に不安定な形の神々しい光。　これなら太刀では弾かれない筈。
と漸は踏んで光神を放ったのだった。　すると夜叉は光神を見て微笑。

そして言う
「成る程、これは斬れないな」
すると夜叉は地面を蹴って大きく横へ跳び、光神を回避。　光神が宙を泳ぎ、消滅する。　またかわされた。
「くそっ……」
ならば、と漸は袖の中から一つの球体を取り出す。　それは半分が黒で半分が白色の球体。　陰陽玉である。　それをどうする？
と夜叉は身構え、それと同時に漸は陰陽玉を夜叉へ向かって投げた
まるで野球のボールの様に。
「！？」
そしてそれを見た夜叉は少なからず動揺した。　何故意味のない行動を？　と予想外の行動に一瞬戸惑い、それが隙となる。
「これでも、喰らってろ！！」
その隙をついた漸は既に夜叉の懐に走り込み、お札のはり付けられた左手で夜叉に殴り掛かった。　それに夜叉は反射的に太刀の刃の側面を漸へ向け盾とする。　ガキィン、と拳と刃がぶつかり合い金属音が響く。
「っ・・！！」
お札を貼付けていたせいかその拳は重く、少し押されたが夜叉は漸の左ストレートを防ぎそのまま漸の腹を蹴って吹っ飛ばした。
漸の身体は数回回転し続け、速度を失い停止。　その瞬間に身体をバネの様に起き上がらせ、身構える。
（くそっ……！）
漸は口の中で叫び、奥歯を噛み締めた。
（攻撃が一発も入らない……）
漸の攻撃を、夜叉はいともたやすく凌いだ。　不意打ちすらも通用しない。　――強い。　漸はその言葉しか出なかった。
（だが、まだ策はある！）
漸は夜叉を睨み、構える。　自分からは攻めない。　すると夜叉も太刀を構え、言う。

「そっちから来ないのならば、こちらから行かせてもらうぞ」
夜叉が風斬り漸へ掛ける。　その時だった。
「陰陽玉！」
漸が叫んだ瞬間、夜叉の身体が宙へ投げ出された。
「……ッ！？」
何が起きた？　夜叉はその言葉を口にする前に投げ出され、そのまま地面にたたき付けられ鈍い音が暗い森に響いた。　見れば先程まで夜叉が立っていた場所には直径三メートル程の巨大な球体が現れている。　よく見ればそれは先程漸が投げた陰陽玉。　それが巨大化した様だ。　成る程な、と夜叉は口の中でそう呟き
「ッ……」
夜叉は地面にたたき付けられた一撃が効いたのか苦痛に顔を歪めながらも起き上がった。　そして、
「おおぉぉお！！」
その時には漸が拳にお札を張り付けて目の前にまで迫っていた――。

賭け

夜叉は咄嗟に刀身を盾にしようと構えるが、
「遅いんだよ！」
それよりも先に漸のお札着きの拳が夜叉の顔面に突き刺さった。
腕に反動がビリビリと伝わる。
「っが……」
夜叉の口が声か解らない音をあげ、夜叉のバランスが崩れる。
そして、夜叉の頭は再び地面にたたき付けられ、
「ーー、」
「なっ……！？」
そのたたき付けられた反動で夜叉は起き上がり小法師の様に起き上がり、漸へ斬り掛かる。
（やばっ……！）
避けられない。　漸はそう直感した。　そして次の瞬間、漸の身体から血が舞う。　胴体を斬られたのだ。　斜めの斬撃により、漸の胴体からは赤い液体が宙を舞った。
「ぐ、あっ！？」
漸の身体のバランスが一瞬崩れそうになるが両足で踏ん張り持ち直す。　そして、後ろへ後退。
（思ったより深くない……？）
漸は斬られた傷を見て眉を潜めた。　あの至近距離で斬られて無事でいられる筈が無い。　なのに斬られた傷はカッターナイフですこし皮膚を斬られた様な物。　傷口は大きいが深くは無かった。
服が盾になったのだろうか？　もしくは手加減か？　とにかく夜叉の追撃に備えて漸は身構えた。　その時だった。
「ーー空斬（くうざん）」
ヒュン、と漸の頬を何かが掠めた。

ズパァン、とすぐ隣の巨大化した陰陽玉に鎌鼬の如く切り込みが入っる。漸はえ？　と声をださなかった。　いや、出す時間が無かったのだ。　見れば陰陽玉が、半分まで切断されていた。　あと一撃でも斬られれば真っ二つになるだろう。　何が起きた？　漸は夜叉へ目をやる。　夜叉は太刀を横へ振り切った様な体勢。

（まさか、斬撃を飛ばしたのか……？）

恐らくそうだろう、と漸は思う。　そんな漸の不可解な表情を見て夜叉は言う

「お前の思っている事は当たっている。　今のは斬撃を遠くの標的へ放つ剣技、「空斬」だ」

その言葉を聞いて漸は背中から嫌な汗が流れている事に気づいた。

今の斬撃を飛ばす剣技は、視界に捕らえる事が出来なかった。

（対応できるのか……？　アレ……）

空斬は人間の胴体視力を越えてるんじゃないか、と苦い表情を浮かべる。　防護壁にもなる陰陽玉を切断しかけたアレが当たれば、確実に人間なんて真っ二つだろう。

（これで手加減してんのかよ……）

漸は泣きそうになった。　やはり、夜叉は本当に強い。　とにかく、どうにかして夜叉の懐に潜り込まなくてはならない。　遠距離攻撃は通用せず、不意打ちは恐らくもう通用しないだろう。　そうなれば、何とか夜叉の斬撃を放つ剣技「空斬」をかい潜りつつ夜叉の懐へ潜り込み、重い一撃を与えなくては勝負にならない。

（厳しいってレベルじゃないぞ、これ……）

まず、「空斬」を回避する事が出来ないかもしれない。　集中して見れば何とか視界に押さえられるかもしれないが不意の一撃ならば先程の陰陽玉の様に切断されてしまう。

「……、」

漸は短く黙る。　そして懐に残っている陰陽玉にちらっと目をやる。　陰陽玉は二つ残っていた。

（アレしかないか……？）

と、漸はその陰陽玉を一つ手に取ってそれを煙り玉の様に地面へ向かってたたき付ける。
「？」
それに夜叉は何をするつもりだ？　といった表情で太刀を構え直す。　その瞬間、漸のたたき付けた陰陽玉が三メートル程の大きさに巨大化した。　巨大化した二つの陰陽玉により漸の姿は隠される。
「姿を隠してどうする？　見えない所から死角へ移動し、不意打ちを掛けるといった魂胆だろうが、無駄だ」
夜叉はそう告げると、太刀を大きく上下左右を切り、先程の斬撃「空斬」を四発放った。　巨大化した陰陽玉に半透明のカッターの様な刃が襲い掛かる。　ズパァン。　と陰陽玉が一つ、切断された音が響く。
そして次は二つ目の陰陽玉に、二撃の斬撃が襲い掛かりその陰陽玉も切断。　これで防護壁となる陰陽玉が無くなった。　そして漸の姿が現れ、そこへ四発目の斬撃が襲い掛かり――
「かっ――……」
漸の胴体へ命中し、まるで豆腐を包丁で切り裂いたかの様に真っ二つになった――。
『漸！？』
その様子を見ていた二人が叫ぶ。　だが返事はない。
「……勝負あったか？」
そして夜叉がこちらへ回り込まなかったのか、と太刀を鞘へ納める。　不可解な表情で。　何故なら、夜叉は四発目のあの斬撃の威力を落として攻撃していた。　人間なら気絶する程度の威力で。
なのに、その程度の威力で何故漸の身体は真っ二つになった？
「……？」
ふと、真っ二つに切断された漸へ目をやる。　目を疑った。　何故、血が出ていない？
普通、胴体が切断されたりすれば大量の血が噴き出すはずだ。
なのにも関わらずその真っ二つになったモノからは血はおろか、一

滴の液体すら出ていなかった。
「――その理由、教えてやろうか？」
不意に、背後から声がした。　振り向くと、そこには――
「うぉぉおおおおっ！！　」
漸がすぐそこにまで駆けてきていた。　片手から神々しい光を放ちつつ、こちらへその片手を突き出し。
「っ！？」
夜叉は声を出す間もなく神々しい光、「光神」に包まれその瞬間、勝負が決した――。

夜叉と漸は、琵琶子に治癒魔法を掛けてもらっていた。　漸の光神により、吹っ飛ばされ更に全身に火傷を負った夜叉だが、琵琶子の治癒魔法によりほぼ完治の状態だった。　漸の傷もほとんど消えている。　改めて魔法は凄いと思う。　普通なら治癒に数週間は掛かるであろう傷を数分で治してしまうのだから。

「まさか、あんな戦略を取るとは思わなかったな」

夜叉が少々悔しそうに呟く。　あんな戦略というのは身代わりを使った戦略の事である。あの時漸は、陰陽玉の防護壁で身を隠してある事をしていた。　それは、最後の一つの陰陽玉を変化させて五十嵐漸そっくりの人形に化けさせて身代わりとしたのだ。　そしてそれを斬らせている間に背後へ回り込み、一気に攻撃してけりを着ける。　そんな作戦だったが上手くいった様だ。　身代わり人形が無ければ夜叉の注意は引けなかっただろう。

「なんとか勝てたけど……夜叉、お前本当に手加減してたか？」

こっちはいっぱいいっぱいでしたよ？　と漸は疲れた様な表情で夜叉へ疑いの眼差しを向ける。　すると夜叉は平然とした表情で

「手加減はしていた。　強いて言うならば俺の「闇を操る能力」を使用していない所で手加減していた。

」

さらっと述べた。　いや、それって余り手加減していない様な気がする。　と漸は小さく口の中で呟く。

「まあ、能力使われてたら勝ち目無かったかもね」

琵琶子が言う。　確かにあれで視界にまた制限を掛けられたら勝てなかっただろう。　あの人食い妖怪の時も視界制限で死にかけたし。

「んで、夜叉は教えてくれんの？　この事件の元凶について」

すると光輝が夜叉へ向き、問う。　夜叉は静かに頷きこう答え始めた。
「言える事は全て話そう。　まず、この事件の元凶は今宵の森に住む能力者の仕業だろう」
「能力者？　そいつは妖怪なのか？」
　漸は更に問う。　流石の妖怪でもこう人間界の機能を停止させかねない力は持っていないだろう。　もし妖怪がそんな力を持っているとすれば、大妖怪くらい。
「俺の知る限りでは、あいつは妖怪ではないな。　人間でも幽霊でも妖怪でもない。　水人でも天人でも竜人でも神様でもない」
　得体の知れない種族だ、と夜叉は言う。　それに光輝は間抜けな声で
「なんだそりゃ？」
　と声を出した。　じゃあ、なんなんだそいつ？　光輝が夜叉へ問う。　夜叉は解らないと一言。　すると琵琶子があ、と何か思いついた様な表情で、
「もしかして、宇宙人？」
「いや、それはないと思うぞ？」
　琵琶子の抜けた発言に漸は苦笑いで答える。　もし宇宙人なんて居たらこのセカイに侵入した瞬間迎撃されそうだ。
「とにかく奴の正体については詳しくは解らんな。　次に居場所だが、この森の道は基本的に一方通行だ。　普通に道を歩いていればこの道から外れない限り辿り着けるだろう」
「また、この道を歩いていれば目的地である元凶の住まう黒塗りの小さな洋館が見えるだろう。　とりあえずは洋館を目印として一直線に歩けば辿り着ける筈だ」
　俺が知っているのはそれくらいだ、と夜叉は話を閉じた。
「ああ、ありがとう夜叉。　とにかく俺達は一度その洋館に向かってみる」
　漸が立ち上がり、教えられた方向へ向く。

「ああ。　ところで、そっちの人間は光輝と言ったか？」
すると夜叉が光輝へ視線を向ける。　光輝は俺？　と頭の上に？を浮かばせて首を傾げた。
それに夜叉は頷き、
「ああ。　お前は刀を使う様だが……そのうち手合わせをしてみたいものだ」
微かに微笑んだ。
「剣の試合ならこの事件が収まってからならいつでも受けて立つぞ？」
勝てる自信は無いけどな！　と光輝は胸を張る。　いや、胸を張るところかそこ？　と夜叉は呟いた――。
黒塗りの森の中、その沈黙が支配する真っ暗な森を歩く三人。
三人は夜叉に教えられた館へと向かっていた。　一直線に歩けば辿り着けると言われたが、３０分歩いても一向にその建物は見えて来ない。　そしてここに来るまでに何度か妖怪の襲撃に遭っており、正直疲れており口数も減っていた。
「この森って、こんなに広かったっけ？」
光輝の言葉が沈黙を切り裂く。
それに琵琶子は少々疲れた様子で
「さぁ……慎重に歩いてるから時間が掛かってそう錯覚してるんじゃない？」
首を傾げながらそう返答する。　そんな他愛ない会話をよそに、漸は数十メートル程先を見つめながら、
「ところで二人とも。　あの光って、例の館のなんじゃないか？」
二人にそう呼びかけた。　その言葉に元気を失っていた二人は口を合わせて『本当！？　』　とまるで萎びた花が水をもらって元気を取り戻したかの様にバッ、と前方へ首を動かした。　前方には約三十メートル先に建物の明かり。　恐らく夜叉の言っていた館のもので間違いないだろう。
「やっとか！　待ちくたびれたぞ！」

「ええ！　なんか元気出てきたわ、さっさと行きましょう！！」
すると二人はそう嬉しそうに言うと、ズンズンと館へ向かって歩き出す。
「お前ら、事件解決の事忘れてるんじゃないだろうな？」
そして漸がため息をつきながらその後を歩いて行った――。

その館は、廃墟と言っても過言ではなかった。
「なんか幽霊屋敷みたいな館だね」
琵琶子が気味悪そうに呟く。　確かに、幽霊が出てもおかしくないな。　と漸は頷く。　三人の目の前の館は、入口が壊れてドアが役割を果たしておらずに地面に倒れており、壁の木の板はボロボロに腐ってめくれ上がり一部穴が空いている。　そして2階の割れた窓からは恐らく先程の明かりであろう光がもれており、異常な雰囲気が漂っていた。　普通の人間や妖怪なら用事がない限り近づきはしないだろう。　そんな幽霊屋敷の様な小さな館を見つめながら漸は一歩、前へ足を踏み出した。
（この中に事件の元凶が居るのか……？）
そして半信半疑で壊れた入口から館の内部の様子を伺う。　薄暗い所々壊れた廊下の奥には階段が一つある。　どうやら見える範囲には人は居ないらしい。
「よし、入るぞ」
そして漸は館へゆっくりと音を立てない様に足を踏み入れた。
光輝と琵琶子もその後に続き、薄暗い館へと潜入して行った――。

館の内部は薄暗く、かび臭かった。　床は腐食して抜けてるし、壁も穴が空いていて普通の人は住めない様な状況。
（本当に誰か居るのか？）
と少々疑ってしまう。　そんなギシギシと軋む廊下を歩いていると、横に部屋の入口。　普通に洋室のリビングが広がっており、庭へと繋がっている。　そして何故か、その部屋だけは床や壁も綺麗で誰かが生活している様な部屋だった。

「ここだけ綺麗だな」
と不審に思い光輝がリビングへと入り、部屋を見渡す。その後から漸と琵琶子も部屋へ入るが特に誰も居ない。　だが、ふと庭へ目をやるとそこは洋館にはミスマッチな日本庭園で、様々な桜が咲き誇りそこだけに差し込む月光が反射して紫色に妖しく輝いていた。
そしてその桜が咲き誇る日本庭園の中央。　そこに人は居た。
「人……？」
漸は目を凝らす。　庭の中央にある巨大な枝垂れ桜の下に、一人の女性。
そこには反射した紫色の月光に照らされ紫色に輝く白髪に、犬の耳、そして桜が描かれた着物を纏い、お尻からは犬の尻尾が生えており、赤い目をしていた。

「誰ですか？」
その人は、こちらを見ずに一言。　そう言った。
「誰ですか？　貴方方は」
犬の耳が生えた女性がこちらを見ずにまた、問い掛ける。
「え？　誰か居んの？」
その問いでようやくその女性の存在に気付いた光輝と琵琶子が漸と同じ方向を見、驚いた様な表情。　そして漸は短く黙ると足を前へと踏み出し、妖しい光が降り注ぐ美しい日本庭園へと踏み入れて行く。
「俺は人間界の神社所有者だ。　お前が、この騒動の元凶なのか？」
そして、そいつから目を離さずに答え、問う。　その問いに彼女は少しの間を置くと、ゆっくりとこちらを振り向いた。　二重が特徴的で綺麗な紫色の瞳で落ち着いた顔立ちの女性。　その女性、八神桜は静かにこう言った。
「いえ、私はこの館の主に仕える妖怪の八神　桜と申します。　また、この館の主が貴方の言うこの騒動の元凶です」
どうやらこの人の他にもまだ人が住んでいるらしい。　そしてそ

いつが、今回の騒動の元凶だと言う。　だとすれば、やる事はただ一つ。
（その元凶の奴を探し出すか？）
漸は目の前の女性、八神を見る。　少々警戒した気配が感じられる。　恐らく元凶を探し出すのを警戒しているのだろう。
（だとすれば、今探そうとすれば俺はこの八神って奴にやられるな……）

ならばまずは八神を倒すか……？

「解っているとは思いますが、逃がしませんよ」
するとやはり八神はそう言った。　こうなるのは予想がついていた。

ならば、倒すまでの話。
「俺はこの騒動を収める義務がある。　だから、それを邪魔するなら倒させてもらう」
漸は身構える。　それを見た八神は特に攻撃をする訳でもなくただ立ち、こちらを見たまま動かない。
「そっちから来ないのならこっちから――っ！？」
漸が駆け出そうとした瞬間だった。　目の前の地面が、割れた。
いや、正確には地中から巨大な触手の様なモノが地面を割り、現れたというのが正しいだろうか。　するとそれを見た琵琶子の顔色が変わった。　そして、驚いた様な表情でゆっくりと口を開く。

「これって……妖桜（ようろう）の根？」
「妖桜？」
なんだそれ？　と光輝は刀を鞘から抜き払うと琵琶子に尋ねる。
すると琵琶子はうん。　と頷き、こう説明した。
「妖桜っていうのはね。　妖力を持つ桜の事で、術者の意のままに

動くモノの事。　あの八神って人はそれを操る能力みたいだね」
　――妖桜を操る能力。　それが八神の能力らしい。　だとすれば、この庭の桜。　それは――、
「まさか、全部妖桜か！？　」
「――、」
　だとすればまずい。　この庭には無数の桜がある。　もし、それが全て妖桜だとすれば、この庭全体が彼女の攻撃範囲という事になるのだから。
「まずいな……」
　漸の引き攣った表情からそれを読み取った光輝は苦笑いで
「これって、三人でかかってもいけるのか？」
　刀を構える。
「まあ、勝てない訳ではないんじゃないかな？」
　そして琵琶子も掌に茶色の球体を浮かばせ、構えた。
「三人ですか。　神社所有者に自警団に魔法使いとは、中々厄介ですね」
　まあ、倒しますが　と八神はそう言葉を付け足し、地中から現れた土管くらいの太さの妖桜の根を手で撫でるながら。
「来るなら来て下さい。　主人、夜式（ヤジキ）様の邪魔はさせませんから」
　とにかく、考えるだけ時間の無駄だろう。　この不利な状況を打破する方法は、戦いながら捜し出せばいいのだから――。

根の鞭

『うおおおおお！！』

漸と光輝は地面を蹴り、八神へ向かって爆発的に駆け出した。

それに対し八神は表情一つ変えずに妖桜へこう命じる

「妖桜の根よ、その身体を鞭の様にしならせ敵を全て薙ぎ倒せ！」

すると、妖桜の根が突然蛇の様に身体をしならせて鞭の様に漸と光輝へ薙ぎ払わんとソレは放たれた――。

「光輝！！」

漸が叫ぶと同時か、光輝はせまり来る鞭と化した妖桜の根へと向かって走り出した。

「その桜の木に妖力があるっていうなら……」

刀を構え、

「妖斬刀でも斬れない事はない！！」

そのまま鞭へ向かって一閃。　鞭は切断され、地面に落下。　そしてそれはトカゲの尻尾の様にビチビチと跳ね回っていた。

「斬った……？」

八神が不可解な表情を浮かばせる。　確かにあんな土管の様な鞭を普通の刀で切断しようとするなんて馬鹿げているし、普通に無理だ。　だが、光輝の持つ妖斬刀。　それは切り裂く対象に妖力が含まれていれば基本的に例を漏らさず切断が可能な代物なのだ。　すると八神は一瞬の真を置き、不敵に笑う。

「何故斬られたかは解りかねますが、中々厄介ですね。　ですがその刀は一度に複数の攻撃を、捌けますか？」

嫌な、予感がした。

「妖桜の根よ、その数多の根を槍と化し敵を貫け！」

彼女の言葉に、地面の中から無数の妖桜の根が現れた。

（――まずい！）

漸と光輝は反射的に前方へ再び駆け出す。　八神の近くなら自分を攻撃に巻き込む可能性がある。　ならば八神はそれを恐れて攻撃の手が緩むかもしれない。　そう考えての前進だったが、その考えは一瞬にして打ち砕かれる。
「私を巻き込める範囲に、たどり着かせると思いますか？」
と恐ろしい程人形の様な無表情でそう一言。　数多の妖桜の根を槍と化し、二人へ放った――。　避けきれない。　二人はそう思った瞬間だった。
「土よ、壁を創りだし盾と成れ！」
琵琶子の声が聞こえたかと思うと、突然目の前の地面がつき上がって壁となり、そこへ十数本の槍が突き刺さって動きを止め、残りの数十本は地面へ深く突き刺さった――。
「光輝！　さっさとその根っこを使えなくしちゃいなさい！」
そして琵琶子は叫ぶ。　光輝は頷き、地面や盾に突き刺さって止まった根っこへと切り掛かり順番に切断してゆく。　まるで森林伐採を高速で見ている様だ。　その様子を忌ま忌ましそうに八神は妖桜へ再び命じようとしたが、
「この……妖桜の根よ、元の配置に戻――」
「戻させるか！！　」
既に目の前にまで漸が迫っていた――。
「これでも――」
漸は片手に神力を込める。
「喰らって――！」
そしてその神力、光神を八神へ向かって放とうとした瞬間だった。
漸の身体が宙を舞った。
――大量の花びらと竜巻の様な強風と一緒に。
「なっ……！？」
あまりに突然の出来事に眉をしかめる。　――一体何が起こった？　それも解らない内に漸の身体は地面にたたき付けられ、肺から空気が吐き出された。

「っ……ごほっ……！？」
漸は失った空気を必死に吸い込みつつ、自分の身体へ目をやる。
すると、衣服や腕などがズタズタに切り裂かれており、そこからは赤い液体が流れていた。　まるで鎌鼬に切り裂かれたかの様に。
（っ……これは……？）
一体何が起こった？　と漸は八神へ目を向けた。　すると、彼女の腕。　そこには竜巻を纏い、桜の花びらも同じ様に回転している。
「ただ妖桜の根を使えなくしただけで私の能力を防げるとでも？」
八神は言う。　どうやらまだ攻撃手段がある様だった。
「中々厄介だな……」
光輝が苦虫を噛み潰した様に呟いた。　それに隣の琵琶子も頷き、
「ええ、でもあのくらいなら私の防護壁で防げるね」
身構え、漸へ顔を向けてこう叫んだ。
「漸！　今から主に私がサポートに回るから光輝と二人で接近して叩いて！！」
それに漸はコクりと頷くと、前方へと再び駆け出した——。
「また吹き飛ばされたいのですか？」
すると八神が漸へ向けて花びらの竜巻を纏った右腕を突き出し、射出。　桃色の竜巻が漸へ襲い掛かる。　それに対し漸は反射的に地面を蹴り、
「っおおお！？」
横へ転がり込む様にして大きく跳んで竜巻を回避。　そして竜巻がそのまま漸の立っていた地面を削り取ってゆきそのまま庭の岩に激突して消滅。　あれが直撃したらと思うと生きた心地がしなかった。
「——これでも喰らってろっ！」
そして起き上がる瞬間に地面に落ちていた拳くらいの大きさの石を掴み、八神へ身体を向ける反動で投擲した、が。
「ッ！」
八神は特に大きく動かず、頭を横へ傾けてスレスレのところで石

を避けられる。　そして八神は鬱陶しい、と言った表情で片手を空に翳し、

「庭の妖桜の木々よ、その花びらを刃と化し雨の様に敵へ降り注げ」

　　謡うようにそう命じた――

刃の雨

次の瞬間、妖桜の花びらが全て刃と化し漸達に雨の如く降り注いだ――。　四方八方からの攻撃。　回避は、出来ない。
「っ……そおおぉお！！」
そして漸が防御体制に入ろうとした瞬間、背後から声が聞こえた。
「土よ、半球体の壁と成り仲間の身を護れ！」
すると、突如目の前の足場がつきあがり漸、光輝、琵琶子の三人を囲む形で半球体の十メートルくらいのドームが出来上がり、八神の攻撃は遮断されて防護壁にドスドスドス、と刃が突き刺さる音が響く。
「なんとか防げたみたいね　」
と琵琶子は安堵のため息。　あんな逃げ道の無い攻撃をこうもたやすく防ぐなんて、やはり魔法ってすごいな。　と漸は口の中で呟く。　琵琶子は敵に回したら中々厄介じゃないだろうか。　そんな事を呑気に考えていると、琵琶子は手を天井へ掲げて
「防護壁よ、外側へと弾けろ！」
命じる。
それと共に三人を守っていた半球体の防護壁はまるで風船が破裂したかの様に外側へと弾けて三百六十度に攻撃を放った。
「っ！？」
するとそれは庭全体に行き渡り、庭の壁や縁側、妖桜の木を破壊。
そして八神にもそれは命中し、八神の周囲の足場ごと吹き飛び、土埃が舞い上がる。　至る所に戦闘の爪痕が残る庭の中、八神は舞い上がった土埃の中で立っていた。　破れた着物の右腕部分からは白い肌から血が流れているのが解る。　あの防護壁が破裂した事による爆撃でも大きなダメージは受けていない様だった。
「よくもまぁ……これだけ庭を破壊して」

八神は前方に立つ敵三人を鷹の様に鋭い目で睨む。
「知るかよそんな事。　これ以上庭が壊されたくないなら、さっさとこの騒動の元凶を差し出したらどうだ？」
「断ります」
漸の台詞に八神は即答する。　まあ、そう返答されるのも解っているのだが。　どう攻めるか、と漸は身構えると、漸と光輝の背後の琵琶子が耳元でこう呟いた。
「漸、光輝。　向こうは妖桜の数が減ったから攻撃も少し弱まる筈だから、一気に勝負を着けちゃいましょう」
見れば庭の妖桜が数本折れていた。　先程の爆撃により幾つかの妖桜がダメになっていた様だ。　――これなら、いけるかもしれない。
「よし、光輝！　一気に倒すぞ！！」
「了解っと！」
そして、二人は再び八神へと向かって駆け出した。
「妖桜の根よ、鞭の如く敵を薙ぎ払え」
八神が小さく呟く。　すると地中から一本の妖桜の根が現れ、鞭の様にしなって二人を薙ぎ払わんと襲い掛かった、が。　その瞬間光輝は刀を大きく振り上げ、
「効かんっ！！」
叫び声と共に刀を振り下ろし妖桜の根をまるでまき割の様に一刀両断する。　やはり妖怪相手なら光輝は頼もしい相手だと改めて思う。
「なら、この攻撃は防げるでしょうか？」
すると八神は両腕に花びらの竜巻を纏い、それを二人に放ち、周囲の塵や小石を巻き込みつつ二人へ迫る。
「うわっ！！」
漸は咄嗟に横へ跳び、竜巻を足に掠めたが回避。　そして光輝は、
「多分、斬れない事は無いッ！！」
と刀身に半回転を加えつつ、迫り来る竜巻に斬撃を加えた――。

ガキィン、と金属がぶつかり合う様な金属音が庭に響く。
「ふんぬぉおお！！」
そして光輝は全身に力を篭め、野球のバットでボールを打ち返すかの様に刀を奮うと、竜巻を八神へと打ち返した――。
「なっ……」
八神は驚愕の表情を浮かべる。　無理もないだろう。　風、それも竜巻を刀一本で打ち返したのだから。　いくら妖力があるとは言え、そこまで出来るとは八神は思っていなかった様である。　それは漸と琵琶子も同じ。　驚きのあまり、一瞬思考が止まっていた。
というか打ち返した本当も、何故か驚いていた――。
「……っの！」
八神は瞬間的に片腕に竜巻を創りだし、跳ね返された竜巻にそれを放ち、相殺。　すると周囲にゴウッ、と強風が吹き荒れる。　その瞬間、背後から声が聞こえた。
「うおおおおっ！？」
「なっ……」
振り向くとそこには片手から神々しい光を放たんと八神へ走って来る漸が居た――。　いつの間に？　と言った表情で八神は瞬間的に両腕に花びらの竜巻を纏い、放たんとした瞬間。　背後から風を斬る音が、聞こえた。
「！」
その音に危険を感じた八神は直ぐに横へ大きく跳ぶと、次の瞬間自分の立っていた場所を鋭い岩の様にゴツゴツした槍が通り過ぎて行く。　放たれた方向を見ると、琵琶子がそこに居る辺り彼女の攻撃だった様だ。
（とりあえずあの神社所有者の攻撃圏内から離れましたし、次はどうしますかね……）
と八神は思考すると、背後からジャリッ、と小石を踏み締める音と共に
「俺の存在、忘れてない？」と、声が聞こえた――。

「――ッ！？」

八神は咄嗟に振り向く、が。　振り向く頃には庭全体にゴッ、と鈍い音が響いたのであった――。

神ノ式

「っは……」
静寂が包み込む庭の真ん中、八神はその場に座り込んでいた。
そしてその正面には妖斬刀を納刀する光輝の姿。
「知ってたか？　妖斬刀って、妖怪に刀身が触れるだけで力を吸収するんだぞ？」
光輝は言う。　それに対し八神は悔しそうに腹を押さえながらこう呟いた。
「それは、誤算でした――」
あの時、八神が振り向いた瞬間。　光輝は妖斬刀の刃で切り付けたのではなく、刃の反対側。　峰で八神の腹部を打撲していたのだ。
そして妖怪の八神に触れた事によって、八神の力を吸収し、大きな傷を付けることなく倒していたのである。
「相変わらず、妖怪相手には強いな、光輝」
すると背後から漸と琵琶子。　それに光輝は自慢げに
「自警団はほぼ毎日妖怪と戦うから戦闘面では漸には負けないぞ？」
と述べる。　しかも能力を持たないからその分体術が強い。　人間の中でも1番敵に回したくない強さだろう。　そんな事を考えていると、隣の琵琶子が指を口に当てながら
「うん、ところでその八神って人はこの騒動の元凶。　教えてくれるの？」
と八神に問った。
――そう。　まだ問題は解決していない。
「……もう、居ますよ」
八神は俯きながら呟く様に言った。
「え――？」
その言葉に三人は振り向いた。　するとそこには一人の男。　長身で黒い着物に袴を纏った少し不機嫌そうな表情に長めの黒髪で、

狼の様な耳が生えていた。　お尻からは狼の様な尻尾。
　狼の妖怪だろうか？　と一瞬考えるが、恐らく違う。　この男からは、妖力が感じられない。　すなわち妖怪ではない、と漸は結論付ける。　そして、目の前の恐らく元凶の狼男に漸はこう問い掛けた。
「お前が、この騒動の元凶か？」
「……だったらどうする？」
　男は面倒臭そうに言う。
「神社所有者として、この騒動を収めたい」
　漸のその言葉に、そいつは眉をしかめた。
「神社所有者という事は、貴様……狼神の差し金か？」

　――え？

「お前、なんで狼神様の事を知ってるんだ！？」
　漸は驚愕の表情で叫んだ。　何故なら狼神は人間界の神様であるのだが、先代の人間界の神社所有者からの遺言により狼神の存在を他言するな、という言われがあった。　そして漸はそれを守り狼神の存在は一部の神社所有者と神界の神様くらいにしか知り渡ってはいない筈。
（なのに、何故この男は狼神様の事を知っている？）
　漸は不可解そうに顔をしかめる。　するとそこに琵琶子が口を開いた。
「五十嵐君、狼神って何の神様なの？」
「……狼神は俺の主だ　」
　そいつはその質問を無視して言う。　一瞬、聞き違いかと思った。
（主？）
　意味が解らなかった。　こいつの言う主とは、どういう意味なのか。　そもそもこいつは狼神とどういう関係なのか？　そして漸はそんな疑問を口に出す。

「なあ、お前は狼神様と何の関係があるんだ？」
知り合いじゃないと狼神の存在を知る筈がない。　知り合いではなければ一体どうやって狼神の存在を知ったという話だ。　そしてその男は漸の質問に対し苦虫を噛み潰す様な、面倒臭そうな表情で口を開く。
「俺は狼神の式神。　名前は夜式（ヤジキ）　蓮（レン）だ」
その言葉は衝撃的だった。
「式神だと……？」
「狼神様の式神って……じゃあなんでその主である狼神様の管理している人間界でこんな騒動を起こしたんだ？」
漸は問う。　すると夜式はギリッ、と奥歯を噛み締め――。
「あんな奴は主ではない！！」
庭中に怒号が響いた。　確かな殺気の篭った怒声。　周囲の空気がピリピリしている。
「……何か恨みでもあるのか？」
「なければこんな事はしていない。　時間の無駄だ」
夜式は舌打ちしてそう答えた。　どうやら恨みがあるらしい。
すると何を思ったか後ろの光輝が口を開いた。
「それって、どのくらい恨んでんの？」
その問いに夜式は少しの間を置くと、こう答えた。
「殺すくらいだ」
その言葉は重く、殺気を篭めて。
「神社所有者、賢者、または神。　そいつらのみしか神界には入れない。　狼神は神界に隠れている。　だったら、この人間界で神社所有者如きでは解決不可能な事件を引き起こし、この世界の管理人である狼神に最終手段として事件を解決しに来て貰う」
それが俺の考えだ。　と夜式は言った。　確かにそれなら狼神に会い、殺す事も不可能ではない。　だが、式神に神様を殺せるのだろうか？　そもそも夜式はその狼神の式。　主である狼神を殺せば式神の召喚術も解け、夜式も死ぬのではないだろうか――？

「それでいいのか？」
その目的をはたして、自分も死ぬ。　それでいいのだろうか？
漸はそう問い掛ける。　夜式は答えない。
「……、」
「……、」
暫し沈黙。　そして、間を置き夜式は口を開く。
「貴様らの知った事ではないだろう。　で、神社所有者。　貴様は元凶である俺を止めに来たのか？　違うのか？」
「止めたい、けど神様の式神だ。　人間じゃ太刀打ち出来ないとか言うんだろ？」
漸は応える。　実際そうでもないかも知れないが、相手の力量を計りたい。
「俺の力は神と同等か、それ以上。　そしてこの殺気や妖力、霊力が充満している状況は個人としては力が強まる。　意味は解るな？」
確実に神様級の実力者でないと瞬殺だ、と言いたいのだろうか。
もしそうなら戦うだけ無駄、自分だけならまだしも光輝や琵琶子まで死ぬかもしれない。　それだけは避けたい所。　だがこの二人に帰れと言っても自分を置いて行くわけがないだろう。
（一旦引くか……？）
今のままでは圧倒的に不利。　状況的にも、情報的にも。　あらゆる面で不利な気がした。
「……ここは一旦退かせてもらう」
一度、態勢を立て直す必要がある。

魔導砲

「・・・・・・いつの間にか人間界の存在が掛かっちゃってるよ！？　」

麗はありえない、といった表情で叫んだ。

現在、漸は光輝と琵琶子を里へのいざという時の為に向かわせて神社に帰宅。

そして今までの成り行きを麗に全て話していた。

「ああ・・・・このままでは人間界は妖怪により滅ぶかもしれない　」

それに、最終手段として狼神が現れてももし、夜式の言っている事が事実なら、狼神は最悪殺され人間界を管理する神様が居なくなり、人間界のエネルギーバランスが崩壊し消滅するかも知れないのだ。

「どうするの？
お兄ちゃん　」

麗が心配そうに漸へ問い掛ける。

どうすると言ったら、やる事は限られてくる。

「これは狼神様との問題だし、狼神様を呼んでなんとかしてもらうしかないんじゃないか？　」

まあ、今まで呼んで人間界に降りてきた事は無いのだが。
ならば、直に会いに行けばいい。
漸はそう言った。
「え！？
神界に行くの！？　」
「ああ　」
「でも、遠いよ・・・・？　」
麗が苦い表情を浮かべる。
確かにその道のりを考えれば気が遠くなるだろう。
まずは人間界の上空に位置する天界へ向かい、そこから更に上に位置する竜界。
そして、その更に上に位置するのが神界なのだ。
普通にその道のりなら速くても二、三週間は掛かる。
これだと向かっている途中に里の結界の効果が切れたら人間界に壊滅的な被害が及ぶ。
そうならない為には、あの近道を使うしかなかった。
「魔導砲か・・・・　」

その言葉に麗の顔がサーッ、と血の気が引いた。

「ま、魔導砲って・・・・アレ使うのぉ！？　」

麗が涙目で叫ぶ。

「ああ、仕方ないことだ。
あと、麗もついて来いよ？
説得とかは麗得意そうだし　」

「うぅう～・・・・・・　」

麗が恨めしげに漸を睨んでくる。

かなり嫌な様だ。

だが仕方ない。

ちなみに魔導砲とは冥界にある巨大な大砲で、詳しくは向こうで解るだろう。

「とにかく、さっさと行くぞ　」

「・・・・・・はい　」

なるべく急速に動かなくては人間界が危ない。

そのため、二人はそうと決まり直ぐに神社を発った。

――冥界へと。

「――あら、久しぶりね。
兄妹揃って来るのは　」

灰色のくせ毛の長髪に灰色の巫女装束を纏った十六歳くらいの女性が鳥居を潜ると同時に呟いた。

冥界の霊泉神社。

周囲が高い塀で囲まれたその神社の境内。

そこにその神社の所有者、霊泉寺（レイセンジ）　櫟（イチ）は居た。

竹箒を持っている辺り掃除中の様だが、今はそれどころではない。

漸は櫟を見るなり彼女へ向かって駆け出し、

「櫟。　いきなり押しかけてで悪いが、ちょっと「魔導砲」を使わせてはくれないか？　」

櫟の目の前で停止してそう尋ねた。

「えっ？

魔導砲？　どうしていきなり？　」

突然の話に櫟は少々驚いた様子でそう問い返す。

だが漸に一々説明している時間は無かった。

漸は櫟の両肩を掴み、

「頼む！
細かい事情は後日話す！
時間が余りないんだ！！」

そう頼みつつ櫟へ迫る。

すると櫟は何故か顔をトマトの様に真っ赤にして慌てた様子で、

「ちょっ、わっ、解った、解ったから一旦離れて！」

と目を右往左往させながら漸に言う。

見れば二人の鼻が当たりそうなくらい顔が近づいていた。

それに漸は悪い、と一言。
数歩下がる。

「霊泉寺さん、魔導砲使わせてもらってもいいの？」

そこに隣から麗が櫟にそう問い掛ける。

櫟は咳ばらいをすると、落ち着きを取り戻した様子で　ええ。　と
一言頷いた。

そして礼を述べる間もなく櫟は百八十度Uターンして神社の影へと
歩きだし、

「ついて来て、使わせてあげるわ。
魔導砲　」

とこちらへニヤリ、と薄気味悪い笑みを浮かべた――。

霊泉神社の裏側へ案内されると、腰くらいの高さの雑草が生い茂る荒れ放題の庭に出た。

そしてそんな掃除の手が加えられていないジャングル状態の庭の中心だけ、綺麗な円形で雑草が取り除かれており、更にその中心には人間が十人くらい入れるのではないだろうかとも思う様な巨大な大砲が異様な存在感を放ちつつ鎮座していた――。

「うわぁ～・・・・相変わらず大きな大砲だね～・・・・・　」

麗がそれを見上げながら苦笑い。

確かにでかい。

セカイ全体を探してもこんなに大きな大砲があるのはここくらいだろう。

高さで言えば家の二階までなら届くんじゃなかろうか。

「じゃあ、入りなさい。
急いでるんでしょ？　」

そこへ櫟が声をかける。

――この超巨大な大砲【魔導砲】は、魔力や霊力を火薬、砲弾として射出可能な大砲。

そして火薬である霊力を上手く調整すれば人間をも無傷で安全に射出可能な優れモノなのだ。

これを使えば通常二、三週間は掛かる神界への移動もものの数分で可能となる。

ちなみに麗は過去に一度これに乗ったが、射出された後あまりの高さと速度で失神しつつ空中に盛大にぶちまけたというトラウマがある。

「また・・・・・・乗るんだぁ・・・・・・・」

麗が涙目で呟く。

だが仕方ない。

「とにかく、乗り込もう 」

漸は麗の背中をポン、と叩きそのまま大砲に着いている梯子を上ってゆきその後を麗が続いて行った――。

神界

「ちゃんと乗り込んだ―？」

五十嵐兄妹が魔導砲に乗り込んだところで櫟が大砲へ向かって呼びかける。

すると大砲の中からは大丈夫だ、と返事が帰ってくる。

そしてそれを確認した櫟は、両手を魔導砲へ向け、霊力を篭め始めた。

そして、

「射出！！」

櫟が叫ぶと周囲に風が巻き起こり、それと同時に大砲から二人の兄妹が射出された――。

悲鳴すら強風で掻き消して。

「――・・・・・・」

ふと気が付くとそこは平原だった。
平原の真ん中で、漸と麗は倒れていた。
遠くには街が一つ見える。
「着いたみたいだな・・・・・」
そう。　ここが神界。
もう着いたみたいだ。
（それにしても狭い世界だな・・・・・）
再び周囲を見渡す。
見えるのは平原と街。
それ以外は景色が霞んで先が見えない。
神界はセカイで一番狭い世界。
あるのはこの平原と、一つの街しかない。
大きさで言うと琵琶湖が二、三個くらいの大きさ。
なのにも関わらず一番の実力を持つ世界。
更に神界に入れるのは神社所有者と賢者に神様のみ。

それ以外のモノが入ろうとすれば見えない結界により一瞬にして消し炭だ。

「そうだ！
麗は！？　」

ここで漸は麗の存在を思い出し、隣へ目をやる。

するとそこには麗が普通に寝ていた。

（すれ違う神様が皆こちらわチラチラと見てくるな　）

和風や洋風。

屋敷や洋館や宮殿の様な家が連なる変わった街の中漸はため息をついた。

すれ違う神様達にまるで外国人を珍しがるかの様にチラチラと見られる。

少し居心地が悪かった。

あれから五十嵐兄妹は麗を起こして狼神を探しに街へ来たが、狼神の居る場所が解らずさ迷っていた。

ひたすら歩くが見知らぬ街で見知らぬ神様ばかりでよく解らない。

「というか神様がこんなに沢山居ると正直怖いね・・・・　」

すると麗がそう耳打ちしてくる。

確かに神様はセカイで一番強い種族。
それがこんなに居たら全ての世界なんてあっという間に制圧されるな、戦争とかになれば。　と一人頷く。
「それはとにかく、狼神様の家って何処なんだ～？　」
ため息をつきながら周囲を見渡す。
「あ　」
すると神様の人混みの中、知り合いの神様の影が見えた。
「九十九神様？　」
その神様は、灰色の長髪で緑色の羽織りの下に着物を纏った長身の男性。
名前は九十九神という。
普通、九十九神と言えば妖怪の一種だが、この九十九神は違った。
彼は多くの信仰を得る事によって神様級に昇格したれっきとした冥界を管理する神様である。
そんな知り合いでもある神様、九十九神が、こちらの存在に気づいた――。
「お前達は・・・・・・何故此処に居るんだ？　」

こちらに気が付いた九十九神が五十嵐兄妹へ近づいてそう問い掛けた。

それに漸は　狼神様を探しています。　と一言答える。

その返答を聞いた九十九神はふむ、と一息付くと五十嵐兄妹に背を向け、

「着いて来い。
案内する　」

と一言。　九十九神は歩き出す。

「ありがとうございます　」

すると麗がぺこりと頭を下げ九十九に続く。

そして漸も二人の後を追って言った――

――神界の街の東側。

昔の人間界の様な和風建築物が連なる地域。

屋敷やら庭園やらが広がる綺麗な場所。

そんな地域の最東。

そこには小さめの日本屋敷。

九十九神はそこに狼神が住んでいると言い、去って行った。

「・・・・ここらしいな 」

「・・・・・・そだね 」

残った二人はその屋敷へ歩き出した、その時だった。

「お前達・・・・・・まさか人間界の神社所有者か！？ 」

不意に、背後から驚いた様な声が聞こえてきた。

「え――？ 」

二人は同時に振り向く。

するとそこには栗色の長髪には狼の耳の生えた女性。

そして彼女は金色に近い黄色の華やかな着物を纏っており、彼女の後ろには大きな狼の尻尾がゆらゆらと揺れていた。

「狼神様、ですか？ 」

漸はゆっくりと口を開き、彼女にそう問い掛ける。

するとその神様、狼神は頷く。

狼神だった。

やっと会えた、と漸は疲れた様なため息をつく。
すると狼神は少々苦い表情で、
「・・・・人間界で何かあったか？　」
問った。
「え？　」
「言葉通りの意味だ。
突然訪問してくるとは、何かあったか？　」
狼神は険しい表情で漸に問う。
人間界で事件が起きた事を知っているのだろうか？
「はい、時間が余り無いのでなるべく簡潔に説明しますが――　」
漸は頷き、今まで人間界であった事を説明した。
狼神の式神が元凶の事。
そしてその式神の目的が狼神をあぶり出す事。
式神が狼神を怨んでいた事。　それらの出来事を全て話した。
それを聞いた狼神は短く黙り、
「――そうか、やはり怨まれていたか・・・・・・　」

半ば諦めた様に笑った。

（・・・・・・やはり？）

やはり、とは狼神には何か心当たりがあるのだろうか？

と漸は首を傾げ、

「どういう意味ですか？」

そのことに着いて問った。

すると狼神は

「ああ。

過去に色々あってな・・・・怨まれてしまった。

詳しく話すなら少し長くなるが、いいか？」

と二人に問う。

二人は、静かに頷いた。

神と式

『あれは約十年程前――・・・・・』

――神界の最東のこの屋敷。

そこで狼神とその式神、夜式　蓮は暮らしていた。

夜式は式神として力は最大級で、神に近い力を持っていた。

それだけなら何の問題も無かったのだが、夜式には一つ欠陥と言うべきだろうか、ブレがあった。

それは精神面が不安感な所。

何故そんな精神になってしまったかと言うと、狼神が夜式を召喚する為の術式。

それが一部、機能していなかったのだ。

それが原因で夜式の精神面にブレが出てしまい、狼神が近くで精神面の補正を掛けて精神を安定させていた。

そうでもしないと夜式は精神的に不安感になり強すぎる能力が暴走しかねないから。

そしてそんな夜式を他の神は恐れ、近寄らなくなり、「出来損ない」、「化け物」、などと暴言を吐かれた。

正直、神が差別をするなど本当に詰まらない種族だ、と狼神は思っていた。

夜式は狼神のみが頼りだった。

狼神以外の者は夜式を恐れ、差別する。

狼神以外には誰も居なかったのだ。

そしてそんな日常を送っていたある日、夜式はこう狼神に問い掛けた。

「狼神様・・・・貴女は俺の事を出来損ないだと思っていますか？」

「思う訳ないだろう？
私はそんな事を思ったりしていない。
お前を裏切る様な事はしないさ 」

二人はこう約束した。

一一裏切らないと。

『一一だが、私は裏切ってしまった。
約束を、破ってしまった 』

――それはあの約束を結んでから数年が経過した頃だった。
狼神と夜式はあるちょっとした問題で喧嘩していた。
「だから狼神様は――、　」
「五月蝿い、出来損ない！！
――あ・・・・　」
しまった。　狼神は焦った。
喧嘩などでよくある相手の気にしている事を言い合う様な喧嘩。
そんな喧嘩で無意識の内に夜式の気にしている事、「出来損ない」
という言葉を口走ってしまった。
ただのくだらない言い合いという幼稚な喧嘩で、狼神はあの約束を
破ってしまった。
裏切ってしまったのだ。
その言葉に夜式は停止する。
「やっぱり、狼神様は俺の事を出来損ないだと思ってたんですね・・
・・・・　」
落ち込んでいる様な、怒っている様な低い声でそう呟く。

違う。　狼神はそう叫びたかった。

だが、むきになってつい口走ってしまった悪口程度の言葉は夜式にとっては裏切られた様な物。

つい言ってしまった、許してくれ。　なんて事でどうにかなる様な物ではないのだ。

狼神は後悔した。

――喧嘩なんてするんじゃなかった。

弁解の言葉など見つかる筈なく狼神唇を噛み締める。

それと同時に、

「・・・・・・」

夜式は無言で周囲に爆発を引き起こした――。

「っ！？」

その爆風で部屋は吹き飛び、煙が舞い上がる。

そして、その煙が晴れた時。

そこには既に夜式は居なかった――。

「・・・・・・」
狼神の話を聴き終る頃。　周囲の空気が重く感じられた。　予想外。
　事の発端がただの口喧嘩から始まった事に漸は内心驚いていた。
「これが、私と蓮の過去。　私はあの日以来神界に引きこもって蓮から逃げていた。　だが、それももうそろそろ終わらせないと駄目みたいだな」
狼神が観念した様に深くため息をつく。
「これは私と蓮の問題だ。　その問題で人間界の関係ない人間が巻き込まれてはいけない」
「じゃあ……人間界に降りてくれるんですか？」
狼神は頷き、隣の何もない場所へ手を翳す。　ビシッ、と空間に亀裂が入る。　何をするつもりなのだろうか？　と五十嵐兄妹は首を傾げた。　すると、その亀裂はどんどん大きくなってゆき、空間が割れて人一人が潜れそうな穴が開いた。　その穴の先は真っ暗で何も見えない。　一体これはなんなんだ？　と漸は顔をしかめる。
「よし、漸。　この中に入れ」
すると突然狼神がそんな事を言い出した。　いや、突然何を言い出すんだこの神様は？　これって奈落じゃないか？　というかこの穴はなんなんだ？　と漸は一人ぐるぐると思考を回転させる。そんな漸を見て狼神は苦笑いしながら、
「大丈夫だ、入っても死にはしないし落ちない。　ちなみにこれはただ単に空間移動する為に空けた穴だ」
「え？　狼神様は空間移動が出来るのですか？」
麗が意外そうに言う。　ちなみに狼神の能力は【空間を操る】能力。
　空間を広げたり開いたり縮めたりできる便利な能力である。　ま

あ、神様は能力を使わずともその神様が持つ独自の神技があるので十分強いのだが。
「さて、まずは人間界の幻神神社へ空間移動するぞ」
「え？　幻神神社に？」
麗が首を傾げる。　理由は大体わかる。　麗は戦う能力を持たないから自分を守る術がない。　下級や中級妖怪ならば防御結界を張って観戦なども出来るだろうが今回は人間界を数時間で潰しかねない実力者同士の戦い。　麗の防御結界でも一瞬で破壊されるのがオチだろう。　だから、麗は神社へ一度送る必要がある。　そこで狼神は開いた空間の中へと入って、
「とにかく、行くぞ」
その言葉の後に続く様に五十嵐兄妹も開いた空間の中へと入って行った。

「・・・・そんなことが・・・・・・・」
――人間界の今宵の森の廃墟の洋館。
今そこでは館の主、夜式が八神に狼神との関係をしつこく問いただされたのでその説明を終えた時だった。　そしてその説明に八神は驚愕していた。　過去に狼神に裏切られた事。　そしてそれを恨み、狼神を殺す為にこの騒動を起こした事。　全てが驚愕だった。
「これで満足か？」
夜式が不機嫌そうな表情で言う。
「・・・・・・、」
八神は答えない。　あまりの出来事に言葉を無くしていた。　それに夜式は小さくため息をついて、
「・・・・チッ、面倒臭ぇな。　話したら話したで黙るのか？　・・・

・・・・俺は用事があるから外へ行くぞ」
部屋の出口へと向かう。
「私も、行きます」
「・・・・・・・好きにしろ」
夜式は面倒臭そうにそう言った。

――館の外は相変わらず暗かった。　延々と続く闇の景色。　夜式はその先をまるで鷹の様に鋭い眼で睨みつけている。　その様子を見て八神は首を傾げた。
「夜式様・・・・・・・？」
「・・・・・・・狼神が、来る」
「え・・・・・」
夜式は前方を睨み続ける。　すると、突如目の前の空間に亀裂が入り、穴が開いきその中からは――
「狼神・・・・・・・！！」
狼神に五十嵐　漸の二人が現れた。
「蓮・・・・・・」
「やっと現れたか、狼神」
夜式は狼神を睨む。
「俺は、お前を殺す。　それだけは言っておく」
狼神を殺す。　それは主である狼神を殺し、自分も消滅するのと同じであり、人間界をも消滅させるという意味。　なぜなら人間界の守護は狼神が担当しており、その守護者がしねばその担当していた世界は消滅する。これは後任の神様が決まっていれば避けられるのだが、人間界に後任の神様は居ない。　つまり狼神の存在が人間界の存在を左右しているのだ。
「蓮……私が死ねば人間界の民も皆死んでしまう」
狼神は言う。
「知った事か、俺はお前を殺し、復讐を果たす」

「それに私を殺せば、お前も死ぬ。　そんなことはさせるつもりはない」
人間界の民も、夜式も守る。　そう狼神は宣言した。　それに夜式は鬱陶しそうに舌打ちして、
「黙れ！　今更守るだと！？　ふざけるな！　今更何を言おうと俺はお前を殺すまでだ！！」
叫ぶ。　それと同時に周囲に殺気が満ちる。　空気がピリピリと震えている様な錯覚をする。　それに狼神は無言で身構え、夜式も構える。　そして今、人間界の存在を左右する戦いが始まった――。

説明不可能な能力

「……、」
静寂の中、戦闘が始まりほぼ無音の空間で狼神、夜式は互いに身構えていた。　いつもは聞こえている虫の囀りも聞こえない、五十嵐と八神が固唾を飲んで見守る中、先手を打ったのは夜式。　地面を片足で蹴り、ほぼ一瞬で狼神の眼前へ迫る。
「しっ！」
そして夜式が一気に息を吐いて狼神へ拳を打ち込む、が狼神はそれを屈んで回避。　背後の木へ命中した瞬間、強烈な衝撃波が巻き起こる。
「っ！」
狼神は直ぐに地を蹴って飛翔し、それを回避して少し離れた場所に着地。
「おい…、拳の一突きだけであの威力なのに何であの木には傷一つ付いていないんだ…？」
離れた場所からその様子を見ていた五十嵐が隣の八神に問いかける。
　すると八神は頷き、口を開く。
「はい、この【今宵の森】の中にある木々や地面、岩などはあらゆる力を持ってしても傷一つと付けることの出来ない魔法が掛かっているんです。　まあ、能力で変形させる事は可能ですが、その場合魔法の効力が切れますから相手に打ち負かされたりもします」
「なるほど……じゃあ、夜式の能力って何だ？」
更に漸は問う。　現在夜式の能力は判明していない。
「はい、夜式様の能力は、【不明】、説明不可能な力です」
「なに…？」
――不明？　漸は耳を疑った。
「夜式様は、体内に月の光を取り込み、それを消費して能力を発動

します。　その時に、それに見合った蓄積量の月の光が放出されますが、この森では関係ないでしょうね。」
八神は言う。　確かに、この今宵の森は外部からの光を全て月の光に変えているため常に能力を全開出来る。　しかも今の人間界は夜。
もし森の外に出ても関係ないのだ。

「ちなみに、夜式様は月の光をしようして、様々な力を発動します。
触れた相手を吹き飛ばしたり、受けた攻撃を掴んだり軌道を変えたり…何が起こるか解りません」
「……そんな相手に勝てるのか……？」
話しを聞いた限りでは、夜式は自分に触れたモノに影響を及ぼすようだ。　それでも狼神にもキツイ筈だが夜式を生みだしたのは狼神。
何か手はあるのだろう、と既に枯渇した喉で固唾を飲むが、通るのはジンっとした痛みだけ。
（……とにかく、見守るしかないか）
漸はそう思い、狼神へと視点を戻した――。
「・・・・・・蓮、私はお前に殺されても文句は言えない。だが、私が死ねば人間界が滅びる。　そうなれば人間界の人間や妖怪が皆死ぬ。　そんなこと、私と蓮の中での都合で許される訳がない。・・・・・・だから私は蓮を、一度止める！」
この問題は狼神と夜式の問題。　そんな他人には関係ない問題なんかで人間界を危険に曝す訳にはいかない。　だから狼神は叫び、構える。
「知ったことか！　俺は、狼神、貴様を殺す！」
瞬間、夜式が一瞬にして狼神の眼前に接近し、直接殴りかかる。
「！」
狼神はそれを受け流し、掌から金色の柱、神力を蓮に向けて放つ。
「当たるか！」
すると夜式は一瞬で地面を蹴り、飛翔。　金色の柱が宙を斬る。
「・・・・・・」

夜式は空中から狼神に向かって岩石の様に真っ黒な妖力の塊を複数高速で狼神へと落とした。
（間接攻撃も使えるのか！？）
そしてそれは狼神の頭上に落下し、大爆発が起こる。森の中にズドオオオォン、と轟音が鳴り響く。
「い、狼神様！？」
闘いを見ていた漸は心配そうに叫んだ。　蓮の攻撃は狼神様の頭上に落下していた。　あれはモロに喰らえばただでは済まないだろう。
　そして、狼神は大丈夫なのかは解らない。　様子を確認するにも巻き上がった煙で狼神の姿が確認出来ないのだ。
「・・・・・・！！」
地面に着地した蓮が煙の中を見る様に睨む。　何かに警戒するかの様に。　蓮はしばらく煙を注視していると、突然炎の手が煙を突き破り、蓮に向かって伸びてきた。
「チッ・・・・・・・」
蓮が舌打ちして炎の手を右腕で軽々と消し飛ばした。　吹き飛んだ炎が蓮の視界を遮る。
「っ・・・・・・・蓮！」
すると、炎で視界が遮断された一瞬で狼神は蓮の眼前に接近し、蓮に光神を放った。
「ぐ・・・・・・・」
蓮は光神が直撃し、軽く吹っ飛ばされた。　そして地面に落下する直前に蓮は体勢を立て直して着地した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6534v/

セカイ(修正版を投稿するので連載中止します)

2011年10月2日03時31分発行